

主幹・麻生路郎

川柳新誌

四月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年四月一日發行 每月一回（日發行）

川柳雜誌 第四卷第四號

川柳雜誌社發行



◆蛭子省二氏歡迎句會

○日時 三月九日午後七時

○場所 大阪市南區清水町停留所
西入北側 端の坊

○兼題 「空車」三句

○會費 貳拾錢
初心者來會を歡迎す

◆遅日莊柳談會

遅日莊に不幸が引き續いて起り只今では全く留守番があられるばかりですから四月の柳談會は遠慮で中止することにいたしました(幹事)

◆各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします本社之趣旨を賛じ支部設置を希望さるゝ方は本社宣傳部宛に申込まれたし。

◆御禮

本社主幹麻生路郎先生の令息ロンドン君の告別式に御會葬被下尙御鄭重なる御弔辭並に御香奠を忝うし本社よりも厚く御禮申上候

川柳雜誌社
同人一同志

川柳雜誌 第四卷第四號目次

感想・評論

價值批判の一問題
雪の力と卷賣
南船場より
短詩時代來たる
東京から東京へ

研究・其他

柳釋 廿四編まで
評釋 唐柳短解
川柳略語解追加
同じ作に就て
漫畫 泉卵の遊び(一)
撞球の事
悼故ロンドン君
ロンちゃん死

募 集

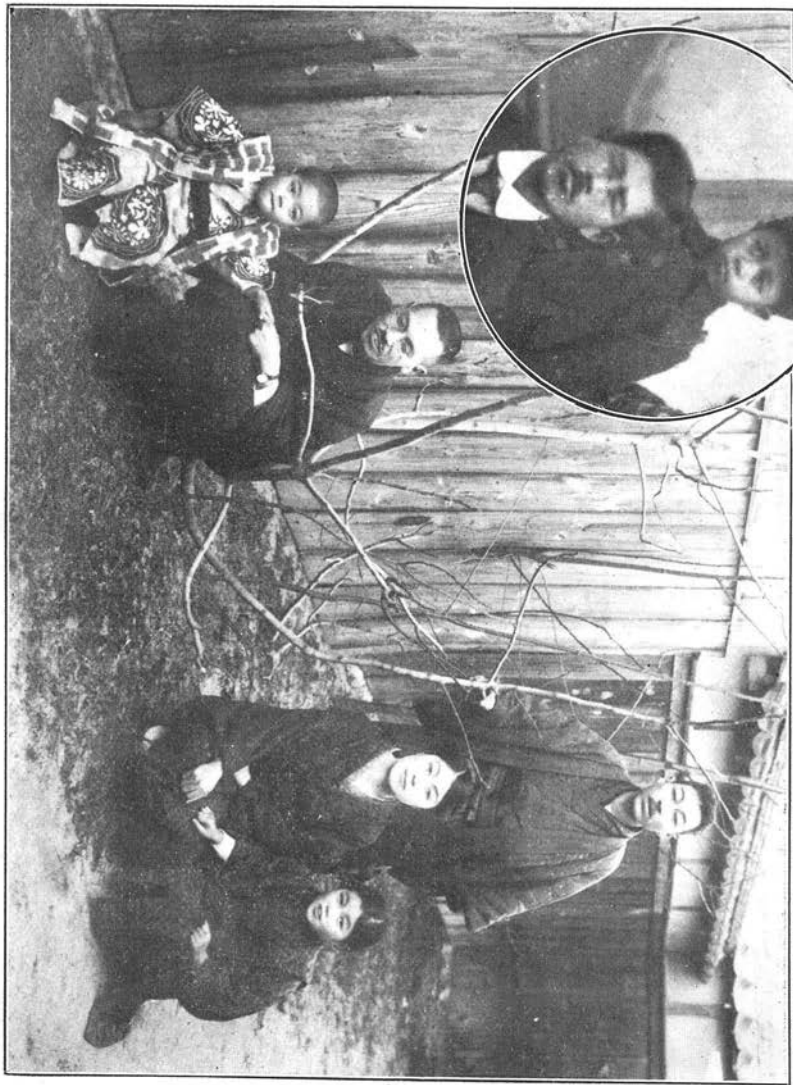
疊鏡靴
本社三月例會
各地柳壇

川柳家戸籍調
文樂人形(表紙繪)
題 字
逝けるロンドン君(寫眞)
轉居と改號と旅
編輯後記
馬谷柴舟 生
小出 檜重
路郎 生

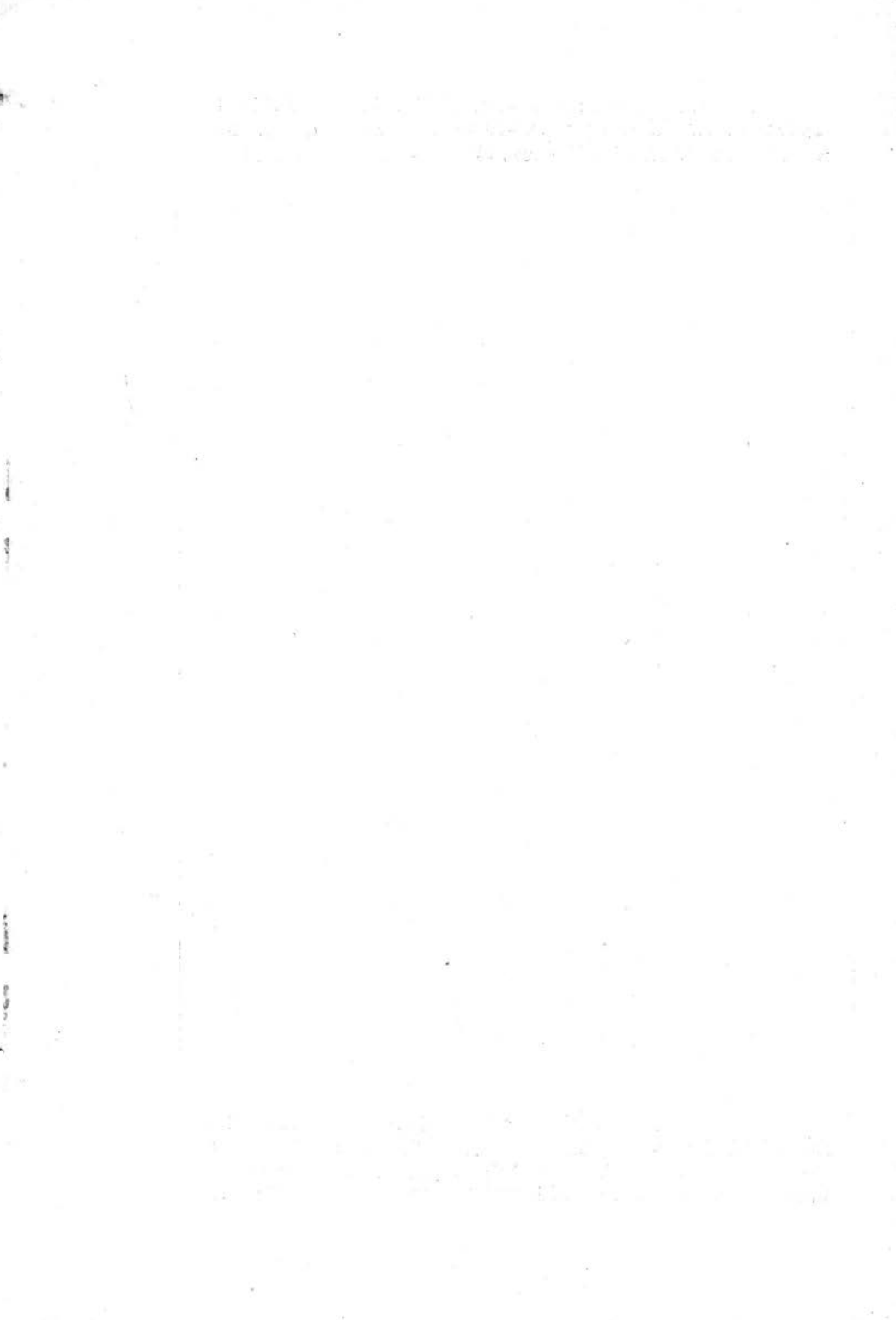
創作

哀傷篇
川柳塔
麻生路郎
塚崎松郎
駒井美の作
西本三笑
岩崎柳人
酒井 二
檜山千代
松本 助
林田馬行
高橋かほろ
庄萬よし
橋本二柳子
安川久流美
森英治郎
木村半文錢
諸家

逝けるロンドン君 故郷生 LONDON 君は本誌主幹麻生路郎先生の長男として大正八年八月九日大阪市西成區三日路町に生まれ、昭和二年三月一日零時四十五分兵庫縣武庫郡鳴尾に於て永眠されました。行年九歳。



(寫眞説明) 上圖は故ロンドン君(八才)と訓導山田順平氏(大正五年十一月病歿、小葬に於て撮影)下圖は向つて左より故ロンドン君(三才)路郎先生、葦乃女史、純子嬢、童謡詩人野口雨情先生(大正十二年五月一日病歿、其時病體にて写真は撮影)





柳 評
樽 釋
廿四篇まで (三)

麻 生 路 郎

(三) 初篇の句 (續き)
指の無い尼を笑へば笑ふのみ

戸外はこがらしが吹きすさんでゐる。比丘尼と二人火桶を圍んで、いろんな物語に耽つてゐるうちに、ふと尼さんの指が一本短いことを知つた。淨い生活、寂びしい生活とのみ思つてゐたこの尼さんの過去にも華やかな夢があつたことを知つた。彼は微笑をふくんで尼さんの顔を見た。尼さんの頬には常ならぬ紅がさしのほつた。けれども尼さんは、その過ぎ去つた経緯について談さうとはしないで、眼で寂しく笑つたばかりである。彼の頭には指まで切つて心中立したこの美しい尼さんのローマンスが渦を捲いた。吉原を出て尼の生活に入るまでの波瀾重疊は尼さんのみが知る神秘としてのこされるであらう。指切を詠んだ句が初篇には三句あるが、三句とも佳い句である。他の二句は次の句である。

ゆびを切るも實は苦肉のはかりごこ
指を切るからは九品の淨土まで

何れも表現の巧なこゝ、後人の範とするに足るであらう。

遊女を傾城よんだころから、實は苦肉のはかりごこといふやうな言葉が興味をひきしほ唆るのであらうと思ふ。妾はあなより外には決して情人はもたない、もたれかかつただけでは、男のこゝろをほんきに捉へるこゝが出来ないので、色慾の二タ道を満足させるためには苦肉の策として、指をきつてまで情人への歡心を買ふこゝを諷したのである。もちろん、さうした遊女のなかには慾の一ト筋で突きすゝんだもの、早く苦海を遁れ出でたいための一策として指切を擇んだ遊女もあつたであらう。

「指を切るからは九品の淨土まで」からは、上品な句振りを學ばなければならぬ。

指を切つて情人に心中立をすることは、いつの頃からにはじまつたも

のであるが、今詳しいことを知るよしもないが、徳川時代の産物であることだけは、これ等の句によつてもわからう。尼の起原は人皇第三十代敏達天皇の六年（西暦五七七年）冬十一月に百濟王が日本の使臣大別王の歸朝する時に丘尼を献じたのが始めて、同十三年蘇我馬子、司馬達等が司馬達等の女、島を佛門に入らしめて善信尼（時に十一歳）と呼びさせたのが邦人の尼としての始である。司馬達等は元は支那の歸化人で、日本婦人と結婚した人であるが篤く佛を信じて佛敎にも精通してゐた人である。

國の母生れた文を抱あるき

江戸へ嫁づいてゐる娘から國の母親へあてての頼りに、「無事に身二つになりました。玉のやうな男の子ださほめられてゐます。妾もござも達者ですから安心して下さい」とある。國の母親の情としては、その喜びを自分一人で、じつこもちたゐることが出来ないで、近所の人達にまで「嫁に行つた娘が無事に玉のやうな男の子を産んだといふて來ました。ようこんでやつて下さい」と手紙を見せあゐてゐるさまを叙した人情味の句である。「抱あるき」といふ五音字の誇張に、母としての至上の喜びが溢れてゐる。

松原の茶屋はいぶるが景になり

川柳の寫生句。てく／＼歩いた昔の旅にまつて松原の茶店は沙漠のオーシスであつたのである。疲れた足を休めてくれる茶店が行途の松原に展開されて來たさき、その茶店から、たちのほる煙は懐かしうれいものであつたであらう。まだ青さの残つてゐる松葉を燻べたのであらうか。遙かの向ふには海がのぞいてゐる。山には、きらく／＼残んの雪が耀いてゐる。それ

も自然の美しさである。斯うした松原の景色は月並な景色ではあらうけれども、旅するものにまつては矢張りうたれずにはあられぬ景色なのである。この句を讀むと、松の根方に足をやすめて、いぶる茶店を眺め入つてゐる昔の旅人の姿があり／＼と眼にうかんで來る。旅さいへば、

足洗ふ湯も水になる旅戻り

の句が同じく初篇の中にある。胡麻の蠅をうまくまいてしまつた話などは、後廻しにしても、留守中の女房やござもの安否を聞いたり、御近所の噂を聞かれたりしてゐるうちに、折角汲んで呉れた湯も水になつてしまふことを穿つたのである。亭主の日に焼けた顔をつく／＼眺めて、涙ぐましくなつてゐる女房の姿もよく出てゐる。

のびをする手に腰元はついで逃げ

昔のお殿様、それも徳川時代の天下泰平さに馴れ切つたお殿様なさ／＼いふものは、殆んど戀愛三昧の一生を送つたものである。それも眞から愛されたさ／＼譯ではなく、胡蝶が花から花へ狂ひまはつてゐるやうに偏愛の生活、美しいものの精を虐ける生活に、あたらし人生を醉生夢死に送つたものである。

あゝ、あゝ人生は退屈であると思ふ日が續く殿様の、ぐつこのびをする拍子に女のやはらかい衣の觸感がそのまゝではすまなくなるのも自然であらう。早くも腰元は、それを知つて逃ける。たゞへお殿様であらうと、さうおもちやになることをのぞんでゐるものばかりではなかつたからである。殿様の間抜け

た顔が、やがていきさうしく血を濺いで来る。腰元は脅かされた子雀のやうに翼をすくめて慄ふてゐる。この句は大名の痴呆的狂態を暗に罵つたのである。

すてる藝はじめる藝にうらやまれ

藝者が今では、れつきこした内儀さなりすまして、もう昔の藝は捨て、しまつてゐる。それを、一方では藝で立つて行かうとしてセッセと稽古をしてゐる女がある。この二人が知り合つた仲であるので、これからの女が、『こんんころは何う弾いたらいゝの』と聞くに『一寸貸してご覧』と云つて内儀は三味線をうけこるこ、さも無造作に弾いてのけるので、これからの女は、甚だしく、それをうらやむこを詠んだのである。

初ものが来るこ持佛がちんこ鳴り

さびしい句だ。茄子であらうが、瓜であらうが初ものだし、つては、まづ佛壇に供へる。その合圖でもあらかのやうに、ちんこ鉦が鳴る。父じきあこの母の小さな髻が、佛壇の前に一層小さく見ゆる。幽に香の匂ひが漂ふて来て、無常迅速を更に深くさせられる。

こそぐつて早くうけこる遠目鏡

一寸した穿ちの句である。品川の沖なぎが手に取るやうに見えるので、見てゐる方では、いろんな情景を口走つては、傍らで目がねのあくのを待つてゐる連れの好奇心をそゝるのである。そゝられた方では待ちきれなくなつて、こそぐつても早く入れ換はらうとする。そこに軽い穿ちがある。今でも斯うした情

景に接することがあるが、遠目鏡の珍らしかつた、その當時では、この句なきは實に清新な句であつたに違ひない。

お袋をおごす道具は遠い國

いろ街の遊び位なら、知つて知らぬふりもせうが、うつ、買ふ呑むの三道樂が揃つては、もう立派な遊び人である。

親爺も、もう、母のさりなし位では、うごきさうにもない。勘當さきまつては水の手がこまる。道樂息子にはそれが一番怖ろしい。そこで考へつたのが『遠い國』である。何んとしてゝも父の心を騙へさせなければならぬが、その父をうごかすものは母より外にはないので最後の手段に訴へたのである。

『もう斯うなれば遠い國へ参るより致し方がありません。永い間不幸の限りをつくして來ましたが、これ以上御迷惑をかけることもありませんまい。ごうかおツ母さんも、おからだを大切にしてください』と暗に死を決したやうな口物を洩らす。斯う云はれて見るこ、若しかさいふ氣が出るのが女親の情である。必死になつて、父の強硬な態度の緩和につまめるのである。あゝ、『母親は勿體ないがだましよい』である。(つづく)

◇前號此の欄の正誤◇

十六頁上段三行目『夕べの』は『昨夜の』の誤り。十七頁下段十三行目『式亭三馬の』は『十返舎一九』の誤りにつき共に訂正す。



近作柳樽

路郎

眠りまろかれゝ母は手をのばし
細紐は丸い心でゐるつもり
壺をいふ申合せでみんな寝る
安物に子供の方も嫌氣さし
大阪でたまされたのも修業や
カーテンの内疑へばうたがはれ
よその子の頭撫でるゝ眼をおとし
人間の顔を鳥かごからながめ
花吹雪の下で園子は包まれる
人間の知恵錠前を頼りすぎ
淀川をはつきりみせて春霞
晩酌の前善人になりすまし
子の下駄がみんな散らばるすこやかさ
女湯の晝ひつそりゝ朱子の襟
陽炎のなかに蝶々浮いてみ
ちんまりゝすわつて母のまだ若し
別荘のお茶をよばれてかへるなり
遠ざかる故郷の空も晴れてゐる

大同同同同同同同同同同同同同同同同同

版

島

同同露同同同同同同其同同同同同同同山

樓

象

斗



兄らしう上等兵で戻るなり
死場所をこゝらにきめて宿をさり
頭を丸う刈つてしまひな
又も立派にたつた銀行
菊五郎烏打帽がよく似合ひ
駒下駄を借りて庭先ほめ歩き
立志傳不正な儲け書いてなし
肉糺裨聞けば哀れな話なり
さがし物頭を打つて止めちまひ
春風が一枚めくる立志傳
一杯のお湯仰山に湯氣を立て
貨車一つ離れてまんだらけ赤し
果物屋吹雪を受けて人もなし
戀に生き二階に炭もおいてゐる
遠吠ゑに旅の心となつて寝る
今一目夕日拜みつ汽車に揺れ
孫ひまご集めて何も言はず死に
四十九日空を仰ふけば月まるし
黙々古本を積み上げて居る
白髪氣付かず天才の子を育て
言過ぎてカンピンの酒出来すぎる
三味線が弾けさうなのが貞女で居
洋服を振向かせたりしんし張
新婚へ出雲の雪は面白し

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

阪

同同同凡同同同同雅同同同同同大同同同同同同秋同同同同

夢

平

151

子

臍



下女の手さ見くらべてゐる許嫁
家計簿のこれもお前のものにされ
映畫より前の二人に氣をさら
鮮人さ鮮人喋舌るまいこさ
嫁にゆく時人力に乗つたきり
漫畫にされたのを陣笠うれしが
寄宿舎の窓芋の皮豆の皮
妻の留守子供本位に日を過し
吊皮の一人車掌の肩をもち
金のあるうちに散髪思ひたち
春の草寒さ見限るやうに生え
女房の留守股火鉢子が習ひ
碎けてる暮しを見せる長火鉢
切れた紙鳶暫し見惚れる程に飛
安來節振袖の子がませてゐる
羽子板で追はれて逃げる抱車夫
腹の立つ手紙でやはり父の愛
はや二年大地の草を踏みも見
奈良七重線香くさいごこばかり
一列車おくらして来る髪の出
木の上の猫馬鹿にした聲を出
辻褄を合せお針子笑ひ合ひ
角砂糖笑ふ話でほりこまれ
寢間着着て私も貰ふ風
大阪で女一人でくらしてゐる

同同大同同同同島同同同同松同同同同大同同同同山同同

阪 根 江 阪 梨

同同聞同同同同櫻同同同同穗同同同同啞同同同同天同同

路 坊 波 人 花



滿洲へ希望の兄は蒲柳にて
その家庭見せ様さいう兄の動作
ご近所へ遠慮しいゝ且那來る
宿題へ親の知識もためされる
たまゝに出来るに疑持つ夫
笥台の上で子供をこはがらせ
精神に生きたしうまいものは好
座蒲團を半分敷くのも遠慮なり
お道話も上手お世辭は尙のこゝ
先づさう決めてきせるの音高し
何事も母がしてくれ來たひゞり
刺青におつさん若い日もあつた
面白く寺の廊下を子はすべり
ビルディングそこから闇が押しせまり
事務服を着替て女らしう居る
年々へばバラリ出した水兵さん
泡雪が物足らぬらし膳の先
子の行くがまゝに日曜歩るくなり
廣つばに辻堂一つ物すゞし
損してもかまはないのが又儲け
世間からはなれ研究室に居る
ご近所に不幸がつづく月でした
花嫁の姿さなつて少してれ
再婚の女こつそり汽車で立ち

同兵同神同朝同同別同同青同同神同同東同同神同同紀

伊 戸 京 戸 森 府 鮮 戸 庫

同千同一同一同同童同同團同同素同同春同同志同同無

鳥 笑 根 翁 子 生 木 郎 心



これ以上母親だます氣になれず
 始から喧嘩せぬ氣のおだやかさ
 ねんごろに涙で送る山の人
 月給きのみ信じてる送り米
 置時計暗い六疊で鳴つてをり
 夜學から飯りの下駄がやかましく
 齒の痛む子は憂し親は更に憂し
 親となり子に呼ぶ神の戯れか
 訓辭きく目は社長の金ぐさり
 飲める會二つあるのに迷つて居
 道をきくこさばもごこか春らしく
 あんな氣さ知つてゐながら腹を立て
 かけ聲の後で荷物は音をたて
 つつばつたやうに新調あるいてる
 勝氣な氣性で増す年期
 挽回をする氣田畑を金にする
 風のない日の木はすねたやうに立ち
 女給にはちさ惜しすぎるしこやかさ
 丹前の上へトンビで訪ねて來
 稼いでる人を戀しう病みつつけ
 舊正月だ氷上にそりもをらぬ
 昨十二月廿六日に一句
 神去りしのち靜かなる松に見ね
 今朝みれば昨日時化たは嘘のよう

大	豊	岐	神	長	枚	東	天	大	大	安	同	同
阪	中	阜	戸	野	岡	京	津	阪	阪	東	同	同
裁	案	靜	笑	高	與	同	同	同	同	同	同	同
磨	子	山	人	峰	詩	久	嵐	坊	秋	蝶	同	同
柳	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
哉	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同



それもいゝそれもいゝが三異見なり
 三等局いついてみても待たされる
 奉悼(二句)
 仰ぎみれば東の空はくもりがち
 割前をまづ年寄が口をきり
 割前にしては惚氣がちつゝすぎ
 白粉もぬらずに魚うりに来る
 まだ飲ます氣かほゝゑんで女給来る
 信心で来たケールへ乗りおくれ
 母のある事がうれしい水枕
 丁寧にたゝむ一枚よりない着物
 金持であつたらやるさいふ話
 劍戟の孫にこたつをうばはれて
 勉強をせよいや体が夫婦もめ
 またぬくい日もあるだらうと母がいふ
 カーンを引いて今宵の夢に入る
 雪だるま目拔の場所に黒くなり
 廢坑の松はそのまゝ老けて行き
 湯を出れば雪氣持よく降つてゐる
 怒つては見たが親父は金を出し
 言譯が立つて深切わかつて來
 職工の腕に喪章がよれてゐる
 綻を知らされてから走り出し
 おもちや屋の喜ぶ日和續くなり

同 大 尾 大 鷺 函 福 安 同 大 大 神 岡 同 同 大 同 玉 同 大 同 豐 同
 二 一 阪 州 阪 尾 館 岡 縣 阪 阪 戸 山 阪 島 阪 橋

源 醉 古 翠 昭 春 無 句 籬 さ 進 芳 龜 眺 同 舟 同 耕 同 悟 同 縁 同
 岐 一 香 太
 坊 夢 柳 峯 郎 忘 限 若 楓 舟 郎 子 珍 郎 々 水 郎 郎



唐柳短解

蛭子省二

(六八)二人して詩をはきそうな竹節
寒山拾得で類句は澤山ある「寒山が高名
をする盤紆」「寒山の友達いしやはれ
着なり」「審ご巻物忘れると和合神」唐
の憲宗時代の人で天台山國清寺豊干の弟
子、文殊普賢菩薩の化身なりと云ふ、俳
句もよく詠まれてゐる。

寒山と拾得とよる落葉搔 許六
寒山詩集一卷あり、豊干拾得詩一卷を附
刊す、台洲の刺史蘭丘嵐寺道翹をして蒐
輯せしむ寒山の詩多く拾得と豊干は二
首存するのみ。
(六九)枝のある長刀をもつ壽亭侯
曹操は顔良を誅してより、彌々關羽を重
じ壽亭侯に封じ、帝に奏して印を歸させ

張遼を使さず關羽は辭退す曹操暫く思案
して我誤れり鑄改して漢壽亭侯印とて
再び送る、關羽見て打笑ひ、丞相よく我
心を知り玉へりて、再拜して受く
關羽は重さ八十二斤に青龍の偃月刀を作
り冷鍛鋸と名けた、古句に「五月のは八
十二斤内儀もも」、「關羽でも産れたよ
うなつかひもの」

(七〇)禮儀からみれば勘忍高いもの
禮儀三百威儀三千の語がある

三百の禮儀四百の國で出来
浮世派に「そりや馬鹿者ぢやと思ふて、
ハテまけたがわいは堪忍五兩負て三兩の
からぢや」三ある、分別四兩、遠離三兩
遠慮二兩、堪忍五兩、截斷八分、此用二

分、利根一兩

(七一)青蛇錢鳩を飼ふ氣いつかふなり
さし身ふるまい子母錢をいひ延べる

搜神記に「群であるが、柔かい方面で註
脚をつけて置く。黄表紙唐來三和作「世
上廻り親子錢獨樂」に「漢の淮南王の時
南方に蟬に似たる虫あり名付て青蛇とい
ふ、草の葉に依りて子を生ず其親子の血
を取つて錢にぬりて世間へつかへば、親
此錢のちなみにてかならず一所にめぐり
遇ふ、是を子母錢と名付く、此事を思
ひ出して彼の山岡は三人を賣渡して四文
錢まじりに三貫文の錢を得てより、此法
を持つておかま返しに錢まうけをし、今
は一廉の身代となり兩替屋の店を開き榮
けり、四文錢は母となり耳白が姉、づく
錢が弟となりて子母錢の精あらはれ親
子の別れをかなしむ」
愚雜俎卷之二に「清土の人は文華、甚し
うして文を弄するこゝに甚しきゆへに愚
民を惑はすこゝも大なり、既に子母錢の
こゝを奇怪に説なすがごとし、大體本朝

の無間の鐘も同日の談なり今世金銀の利
足云へるものは利息なり、息は子云
事なり、元銀云ふものは母なり、故に
敷地の親錢を地子錢さはいへり、是以て
子母錢は青蚨の血をぬるごき寓言譬諭
の談なれば愚者痴漢の心を惑はすに至る
眼前金銀の元母を貸して利息をさるもの
青蚨の血ぐをよつものなり」
(七二) 狼の糞火にくべて笑はせる

例の褒姒の句、和漢三才圖會に以狼糞、
積之寇至即燃以望其燭、謂之狼煙蓋狼糞
煙氣直上雖有烈風不斜也

「お妾は褒姒を祖こしねだり事」『機嫌
よく幽王身代をつぶし』『花火に身代幽
王は入れあける』『後の外は笑ひ人が一
人なし』『幽王はこそぐる事に氣が付か
ず』『つんじしたのに幽王はくらひこみ
』等々々

(七三) 七十の賀の頃老子腹にるる

産罷て誕生海老も老子様
八才で米の守を老子出し

老子姓李名耳字伯陽父老聃、累世化身而
未有誕生逆、迨商陽申時分神化氣始假立

妙玉女之胎、八十一年、暨殷武丁二月十
五日卯時、降誕於楚國苦縣瀨鄉曲仁里、
從母左脇而生於李樹下指樹曰、此吾姓也
生時白首面黃長耳短目鼻純骨雙耳耳、有
三漏門、美鬚廣額齒方疎齒方口足陷三五
手把十文

(七四) 石があるさうだぞ郭巨初手思ひ

月夜には郭巨別してゆだんせす
また鍋が出るかぞ郭巨掘てみる

漢の郭巨は字は文舉さいひ河南の人なり
其母の三歳になれるを愛して己の食を
分ち與ふるを常せり、郭巨は之を見て
母の食の足らざらむこを恐れて以爲く
我に子あればこそ母も其食を分ち與へ玉
ふれ、乃ち妻に謀りて、我が家貧にし
て母を養ふこころに任せず、然るに其食
を割きて孫に與へ給ふこそ悲しけれ、我
熱々考ふるに我等が間には又子を舉ぐる
こあるべけれ、母は再び得難し、子
あるが爲めに母の食を割かむよりは、子
を殺して母を養はむに如かずと思ふなり
汝如何に思ふや言ひしに、妻も之に同
意しけり、二人して子を埋むべき穴を掘
けるに、深さ二三尺許りにして蹶の先に

あたるものあり、之れを掘出せば金の釜
なりき、釜の上に文字あり、天賜孝子郭
巨官不得奪人不得取讀まれたり、之れ
より家富みければ子も殺さず母に孝養を
盡すを得たり。

此の事から次の如き句に轉用されてゐる

「若衆さき郭巨さ仇名つけられる」「空
海はやはか郭巨に劣るべき」等
(七五) 赤味噌を片手に孝子買つてくる

王祥を振り廻であるから赤味噌冠せ
ものであらうと思ふ『食好みせぬ孝子
も谷の花』熊澤了介の評論に「問ふ、王
祥が後來の情欲の父母に事ふるさはいか
ん、云ふ、繼母祥を不孝さいひて父に讒
す、愛を父に失ふて天性の恩にそむけり
實にわれ不孝なるがゆゑに此の如しと思
ひて繼母の讒をうらみず、繼母は孝を欲
するにあらずかへつて孝行をいみねたむ
さいへども、祥は其非をさがめずして生
母よりも尙ほ孝行なり、故に母生魚を欲
すれば此の願を叶へざれば不孝なりと思

ひて其の得難きを分別せず至誠に之を求む、其志の篤實は美稱するにこぼなし神明の靈感をいたす所尤もなり、其志は愛すべく慕ふべし其の事はならひ難し、嚴寒厚水の時節の生魚は富貴の人の夏秋より野へおかん事は知らず、貧賤の者いかで俄に川澤に得べきや、もろこしの中國は海遠くして海の生魚は天子諸侯さいへぎも用ひ給はず、たゞ川澤に求むるのみ也、嚴寒には衣をかさねてだに火を用ひざれば居がたし、然るを裸にて厚水に臥さば大病を發すべし、此身組父母より傳はりたり、親の口體の欲の爲に生々の本をそこなはい、親は不孝の罪人也他人に少慈心ある者は人のいたみをいたまはずさいふ事なし、父母の本心何ぞこゝろよからん、王祥にありては是非を論じがたし後世の人これをよしとせば、後來情欲の父母に事ふるに流すべし

(七六) 儒者の庭小人の徳生茂り
儒者の傘君子徳に吹き折られ
論語顔淵篇「孔子對曰、子爲政焉用殺、

子欲善而民善矣、君子之徳風、小人之徳草、草上之風必偃」

「うたたねて儒者は君子の徳を引」『御扇子は君の徳の風を出し』

(七七) 儒者のさう十三經を先づはらひ柳明翁のお説(紙魚一月號)『特に十三經を擔ぎ出した愚意あるかさうか不明であるが或は九月十三日なきの利かせかも知れぬ文化さいふ時代から推せば決して油斷は成らぬ』と參考迄に記す。元來儲者の財産としての書物では十三經が價も高く希望者も多いから、さうか賣拂ふには適當なものではある、十三經とは周易尙書、毛詩、周禮、儀禮、禮記、春秋左傳、春秋公羊傳、春秋穀梁傳、孝經、論語、孟子、爾雅

(七八) 琴離の股倉鱗ずれが出来赤鯉に乗つて昇天した仙人である、琴離浮縣人、有道術、入水不濡、嘗游冀州涿郡二百餘年、一日辭衆入涿水、他日乘赤鯉而昇、其弟子見之

(七九) 深言に曰くさけすみなんすなよ深言は深語と同意で全く秘密をうちあけ心の底を物語る謂ひある、戰國策「使文

王疏呂望而弗與深言、是周無天子之徳」洒落本「新宿穴學問」に「なぜでもさ、ほんにさつきもいいた通、初會からみんだやつださ、おさけすみなんしょうが夜ごさにかはる川竹の(露こっわにて)つらい勤めのその中に」
(八〇) 楊子の幽靈 六道の辻で泣き淮南子「楊子見塗路而哭之、爲其可以南可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑」

合本

出來ました

「川柳雜誌」の合本が出来ました。尤も各巻とも廿部位しかありませぬので早く申込んで頂かぬと無くなりす。先着順でお渡しますからこの廣告を御覽になつたらすぐに御注文下さい。

川柳雜誌 第一巻
第二巻
第三巻

各巻共定價金參圓、送料貳拾錢
總クロス金文字入、製本は特に注意してあります。

川柳雜誌社

哀 傷 篇

麻 生 路 郎

おほきな事實　子が死んでゐる
まだ弟があるやうにいふ悔み聞き
だす入りの一つ缺けてもがたがたし
被^き人^てのない帽子があるに氣がつまり

學校の横に住みて

子を死なし學校に子の多いこゝ

本社三月例会

三月五日夜
於端の坊

松郎、萬よし、柳骨、加香、二柳子、ひろし、鷹歩、飯山、眠聲、冷笑、鮎美、源坊
開路、久郎、彩秋、仙秋、かほろ、砂塔、佳山、水鏡、京二、二葉、醉夢、ひがしで
葉平、わたる、紋太、二南、枝呂、秋晴、三恒坊、舟々、毒仙、翠峰、流星、五六八
助六、刀三、山雨樓、三笑（來會名簿より）

日向（兼題）

紋太選

日當りを雀さ犬がかけまはり 萬よし
そけぬき共日向へついで 助六
龜の池日向へ黒い首が寄り 鷹歩
日向はこおばんの背ながか かほろ
日向はこがてら普請を見てま 飯山
メリヤスの襦衣が目立 馬行
散髪をもうせんならん日向は 刀三
出戻り来てなつかしい日向に 松郎
媼さんを退かせた跡の青寫眞 毒仙
日當りのよい社務所から咳一つ 同
もう襦袢乾いて日向ありがたし 同
眼の開いた仔細日向を眩しが 秋晴
一着は日向でまぶう映され 二葉
道問へば日向をよけて指をさし 同
（人）日向も奉公云ふ身を忘れ 山雨樓
（地）胡塵敷はまの子も来て日向 飯山
（天）叱り今日日向を見に出掛け 刀三
（軸）よい日向向ふこ此所で話 紋太

名僧

松郎選

訪れば名僧木魚拭いてゐる かほろ
名僧の讀經さ知らず蚊が止り 萬よし
御落飾やがて名僧なる御身 葉平
名僧の遺跡に花が散つてゐる 醉夢
名僧は味噌をするのも知つて 彩秋
名僧の山下らるゝ淡い雪 ひろし
印導を渡す名僧眼をつむり 鮎美
名僧は殺風景な日を送り 佳山
名僧が立派な山にしてしまひ 助六
茶を立てて名僧らしく髯をなで 翠峯
名僧さ思想の違ふ子が太り 柳骨
名僧に癒りますかこ又尋ね 二南
名僧の後ろ姿はたゞの人 聞路
名僧も御經は同じ文句なり 仙秋
群衆へ名僧の聲さゞき兼ね 紫郎
名僧のたゞ南無阿彌陀く 眠聲
名僧が來たさ災のビラを呉れ 同
名僧に仕へて五年日が長く 舟々
名僧のかげに童顔白く見ゆ 同
名僧に雨降りつけて降りつけて 同

佳句

一休は幼い時に名を知られ ひがして
名僧のぐつぐつとくだけた奥座敷 二葉
名僧の或日蛙へ物を言ひ 萬よし
咳拂しても名僧有難し 聞路
名僧の話しづかに續くなり 水鏡
高野山建てた大工は忘れられ 源坊
名僧の今日も粗末な膳につき 佳山
名僧へ唯美しい御寮人 刀三
名僧の機嫌さ那が靈が着き 同
名僧さ見ぬぬ姿に腹を立て 同
名僧に要らぬ馳走が列べられ 紋太
（軸）名僧にきいてもらふ皆違ひ 松郎

見合

互選

しつかりして居て見合の恥かし 翠峯
見合した時の氣持で暮らしたい 葉平
髪結へ見合小言を云ふつもり 秋晴
見合から歸つて家を片付け 舟々
度々の見合に娘馴れてゐる 毒仙
見合する時間二人へ迫つて來 彩秋
仲人の話した程の人でなし 五六八
園丁に氣附かれてゐる恥かしさ 源坊
見合でもないぞ彼を引違はせ 二葉
いらつしやい見合が出来で 佳山
母親が一人見合に落つかず 醉夢
その夜見合なやみのベンを執り 冷笑
男前ださ母親にさやかれ 京二
差向ひ見合の時を笑ひあひ 同

心配を中に根據のない話 二葉
心配の家に冷靜な醫者が来る 同
旅立ちへ母はをかしい程案じ 同
氣がゝりの中に故郷は近うなり 同
心配の夜中自分の咳を聞き 同
心配の中へ相手の酒の息 同
心配がよくもかうまあ續くもの 同
心配があつて返事に間がぬける 同
心配へ魚屋えらい元氣で來 助六
心配の中に達者な子の躰 同
園はれて心配の無い人にされ 二南
心配の姿になつて軒に立ち 同
母親は心配するにかゝつて居 萬よし
心配な話へ炭が黒うなり 同
飲んでゝも心配ですゝ常でなし 紋太
心配の大きな女房競べられ 同
心配のきぎれゝに風の音 かほろ
心配へ氣兼ねやうに涕をかみ 同
心配へ新聞庭に落ちた儘 同
心配は氷店まで又走り 山雨樓
心配の家でひんやり手水鉢 同
無口だけに心配するき凄く見ね 同
心配へさうでもないゝに燭がつき 飯山
心配の窓を開ければ屋根ばかり 同
心配は一足づゝにおりてゆき 同

川柳 漫畫 累卵の遊び (一)

路 柴 舟 郎 評 畫

玩具屋の虎だけ首を振つてゐる 一柳子

観じ来れば人世は玩具屋の虎の如し。おのれ一人、得々として首を打ら振ればこそ何かせん。そは累卵の遊びに過ぎず達観せよ。超越せよ。



人前は相思と見えぬお辭儀をし 柳 秀
つらく考ふるに戀愛は風の如し。寸隙に往來し、瞬間的に

生く。階級を超越しては烈風となり、時に涙の雨となる。又華やかなるこそ太陽に輝く向日葵の如く、儚きこころを待たぬ朝顔の如し。無常迅速南無戀愛。穴賢々々。



酒の粕ても焼かうかと夫婦きり 飯 山

『おい』と呼び『はい』と答へて暮すこゝ、茲に歳あり。甘き啼きにもいさゝか食傷氣味となり、生活の淡きこゝ平々坦々たる道を行くが如し。夕刊を讀破し『文藝春秋』を飛び／＼に讀む。これ晨に帽子をいたゞいて出で、夕に靴を脱して疊

上の人となる所謂月給人種の夜の情景ならずや。あゝ、人
 世の退窟漸くにして迫り來たるが如し。



羊羹のこともめてる老夫婦

路郎

世のありとあらゆるものは墳墓へこいそぐ。

「おい」が聴ては「お婆さんや」になり、「ねね貴郎」がい
 つか「お爺さんや」になり、總入歯の老夫婦に戀愛は最早ゴ



ムを噛むにも等しく、甘きものミし云へば羊羹にカステラに
 外ならず。

羊羹のすこしかたいも舊家らし
 ろう吐るばかりの宅と思つて居

なごの句噛みしめて見るも面白からんか。



柳川

略語解追加

西原 柳雨

本誌第一卷第十號から第二卷第四號に亘りて略語かと思はるゝ文句のある川柳を數十句拾ひ上げて置いたが其後又少しばかり贅留めて置いた句を御披露致します

ころぶから夫で流行るゝ藝仲間(安永) 藝者の略語に者さ謂つたことは既に報告済であるが今又此句に接して藝とも謂つたといふことが解つた句義は、ヘン轉吉さんが流行るのはあの爲さ、憚んながら私等は三味線で賣る藝者だよといった様な場合であることはいふ迄もあるまい 半元で一昔居る娘なり(天明) 半元は蓋し半元服の下略、半元服さはお

齒黒だけ附つて眉毛を剃らぬこゝ、一ト昔は云ふ迄もなく十年、是も矢つ張り、橘町あたりに巢をくつてゐた踊子であらう踊子は娘を稱して幾つに成つても振袖を着てゐたものにて「十ヲばかり大きな袖でかくす也(安永)」娘の皮を被つてゐる年増也(安永)』なご澤山の類句がある。又藝者でも少し年増になれば鐵漿を着けたことも例句で證明が出来る「流行らぬさ齒を白くしい黒くしい」(安永) すきなゝ藝者染めたりはがしなり(天明) 踊子をおむすゝ留守居いひ(明和) 句我は前項の説明で大抵盡きてゐるが娘

▲轉居と改號と旅

二〇

△小等原顯氏は空氣の清澄さ遍照の光線ミを懷しみ兵庫縣今津町今津字浦風八十六番地へ轉居

△古屋夢村氏は廣島市段原町百八十二番地(比治山の東北)移轉へ

△山川白蝶氏は永い間の病氣生活を棄てゝ大阪府下池田町字宇保町二六二へ

△西川銀燈氏は大阪西區北堀江御池通一

今の世の中になくてならぬ雜誌で今までになかつた

公憤を讀め 定價一部五拾錢

大阪市北區神山町三三

發行所 公憤社

電話北三〇〇番 振替大阪一八二四番

丁目二十番地に轉居。

△大西須貞吉氏は兵庫縣飾磨町龜山町へ轉居。

△鷺田南耕氏の居住地は神戸市熊内町四丁目一五〇番地改稱。

△住田洛東絳氏は亂取改號。 同人庄萬よし氏は三月八日松江方面へ

をおむすご呼ぶこゝは必ずしも川柳のみにも限らぬであらう。

吳服屋へ来てまですねる秘藏(明和)是も矢つ張り秘藏娘の略である。

田舎を紋なごつけたおひえを菅(寶曆)土弓むす左で射るがきつみそ(明和)

甲のおひねは綿人のこゝであるが芝居なごでも淺黄木綿石持の着附けに薄の叙みいふのは略一定した田舎娘の型である乙の土弓娘は矢取女のこと左の手で揚弓を放つてカチリ的に中るなごは手に入

つた彼等の藝當である

大一座佛にほたをまつける(明和)

ほたは牡丹餅の略、牡丹餅は醜婦の異名であるこゝ先刻御承知の通されば大勢一座の登壇に佛性の御人善が何時でも御多福の相方を授けらるゝこゝは有りさうな事

現在くはを見て三味線繻古させ(天明)現在のくはは不器用に二本さし(天明)

半信半疑ではあるが、くはこゝは果報の果ではあるまいかと思ふ、こゝすれば曲りなりにも解釋は出来る様である、お隣のお梅さんは常盤津が味いのでお屋敷へ上りさうく殿様の御手が附いて今では榮耀榮華のお部屋様そのお蔭でお父つさん迄

が生れもつかぬお侍も出世して田樂見たやうに二本棒を腰にさして威張つてござるこゝは果報なこゝ、内の娘にも三味線の稽古をさせやうやこゝは母親の慾張根生であらう。

焚置をせぬが勘すの落度也(安永)勘すは勘介の略、當時助を略して何す彼すミ稱へたこゝは普通であつたらしが炊煙を見て敵に夜襲の計略あるこゝを悟つた上杉謙信に機先を制せられ甲州方の敗軍となつたこゝを云へる句

こゝは文字太が内ミびくを(安永)文字太は蓋し文字太夫の略常盤津の元祖都路文太夫は鮒や鯉の産地である小松川に隠居したのであるされば魚籠を提げた釣仲間があれば文字太夫の内だこゝ指したこの句。

やねふから刷毛先い／＼出る(安永)枯声の中に怪しいやねふあり(明和)

やねふは屋根船の略稱として當時一般に使用せられ却て御叮嚀にやねふねなご、謂はなかつた様である屋根船は天井が低いからう、かりするこゝ天窓をぶつつけるので騒の刷毛先が損するのであらう乙句は船中の暗突かと思はる。

旅行△同人太田朝陽氏△同人橋本二柳子氏は三月十四日泉州水間觀音へ同伴參詣



△寄稿家蛭子省二氏(朝鮮)は四月上旬關西地方の各地を巡遊される筈。



川柳塔

○

塚崎 松郎

人生は斯くやあらんき玉子割る
針山の針みな使ふのでもなく
あぢない言へば母親覗くなり
御無沙汰を詫びに行くのに二圓いる
よく口をひねられた事思ひ出し
酔ふて戻れば枕のさが洗ろてあり
奥様の挨拶振りを女中眞似
頭下けるも子を育てたいばかりなり
日月はいたづらにたつものでなし

値切つたり負けたり暇の要るこそ
妻留守の火鉢へ頼り切つてゐる
紙ハサミもカバンも買ふてやる氣なり
角帯の結び心地も彼岸過
按摩さんに母を任して風呂へ行き
幸福の標準もなく寂しがり
それはそれは遠い所をまああんさん
棚吊つたあさは女房に任し切り
マリ投げをしてゐる街を子に通り
一升瓶お前酒屋へ去にたいか

○ 駒井美の作

其後さぞ物足りなくお淋しいことを存上候、
ナマズの動き方をらは如何に候や、小生は
東京で洗禮有れば驚かされど、家中はかなり
おびやかされ申候。

蹴だこの手で丹後から泣いて来る
三景の松を根こそぎのむごらしさ

○ 西本三笑

鳥籠や猫はたゝかれ損になり
勅語持つ型で鳥籠運ばれる
爪楊枝 妾ゲツブの多い事
眠むたからうさは男の弱味也
ちと蓄めて家賃拂ふが馬鹿らしく
不渡の日が近づくに櫻咲き
次の子の達者を祈るだけの事
編んでくれた靴下ももう破れたり
もうよいと言へばなほ出す阿呆力

○ 岩崎柳路

伯母の死に面して(三句)

天王寺詣りの連れが一人へり
好な物供へて涙新た也
白酒へきつちり座る女の子
ピンボンの様にはたいて追ふ螢
ゴリキーの全集を読み病んで居る
刑事室ジャンバルジャンを読んで居る

○ 酒井駒人

三越でいつかの話思ひだし
孕んだこの噂人氣に變りなく
口入屋連の一人は外で待ち
家貧にして両親をかへり見す
下らない事根に持つて監督が
夕焼に向つて旅はつゞけられ
温泉で逢へば別れたこの話
預つた金心配な嵐の夜
自動車の止つたここは美容院
夕刊が一枚賣れて雪になり

○ 檜山千代二

降り込まれ今日一日の揃ふ膳

身にあまる借金のみの夢なる
それはそれ目出たきものよ女の子

○ 松本助六

苦をかけてまだ苦をかける女の子
物尺を無理に通して紐さなり
魔法爆酔うて仕舞へば嵩高し
譽められた嫁の不足を言ひかねる
虚無僧はそり身に門をたちかはり
座蒲團の汚れが目立つ木の芽立ち
お師匠の機嫌損ねて舞ひにくし
亂れ髪手燭を持てば物凄し
親分に待たされ炭をあけさゝれ

○ 林田馬行

ローマンス兒は鼻低く眉うすく
膝の上僕の浴衣になるらしい
針金を傳うて嘘が耳へ来る
啄木の才に及ばず二十六
別荘にばかりしくも水が噴き
悟つてか湖のほとりに居を構へ
瀬戸火鉢撫でる手を出る物語

悪い癖言はふ聞かうご新世帯

○ 高橋かほる

三味線が奥で聞こゆる店開き
近所から兩換へに來る好い暮らし
繪の様につゝぢが咲いた廻り縁
まだ明日も居る氣宿屋でつめを切り
しんみり「あるき」に雇仲居愚痴を云ひ
出戻のきけんいそゝ壽しを巻き

○ 庄萬よし

春の雨四五日ぐらゐる寢て居たし
一と晩に銀世界なり藁仕事
めしやにて御互様の五錢貸し
上塗りの色も結婚近い色
焼物のこゝまで叔父の智慧を借り
甘やかすこゝを權利の様に妻

○ 橋本二柳子

そそうした事に主人は笑ふのみ
盜癖をかくまつてゐる母と父
妻にさへ話せばすむと云ふて來る
あけにくい障子は地震からでなし

粒々集

三句

安川久流美

吊つてあるカキ餅の影が減る
五圓札果く銀貨になりたがる
けふの命一言もなく鐘を撞く

近什一束

國民座 森 英治郎

雛菓子さいふを親爺も摘んで見
男雛抱けさ云はれて赤くなり
雛市の嫁に稚ない慾があり
年毎に見る古雛の老
ハシは無いかさ白酒の酌
居るよく喰つた留守番
恐ろしい程喰つた留守番
そこはそれ新劇さ云ふ逃げ所

句稿

(二)

木村半文

椽の下さあ皆んな肩を入れてくれ
春浅し朝湯に杖を突き乍ら
齡一つ夢に來りて儼み去る

291

ごん底に如月の風吹けば吹け
夢に來し小鳥に膽をついばまれ
飢を知る炬燵に足をのせ乍ら
老子より七尺去つて糊があり
犬を賣る友あり暮の五十圓
春にして涙囊炎に惱む子圓
灯る火さ一家五人に迫る飢
敲かば開かれん嘘をつけ
やゝ高き鼻を撮まんて病呆け
尊さはあるがまゝなる現象よ
人生の鞭一分減り一分減り
家に居て心みやまの霧を吸ひ
疑ひのそこはかなき辻に立ち
山茶花に問はず語りの偈を授け
松過ぎの何にゝ勘ねたか高枕
石をけるこゝろは石の先に落ち
友來る友去る春をふさころに
あばら骨たゝかば老子わつさふ
あばら骨たゝかば老子わつさふ
寢ながら骨敲けよさらばひらかれむ
一時二時三時四時五時あけの春
めさめしの君が代春は隣より
足袋の塵尙ほ春秋に富み乍ら
みつめたる硝子割れて南無云ふ
病眼にやをる西行く雲を見て
酒を棄つこも可笑しや酒を棄つ
蛇の舌群衆去つて後の事

悼故ロンドン君

春まだ浅い三月一日の午前零時四十五分に本社主幹藤生路郎先生の令息ロンドン君(九つ)が亡くなられました。小さなユモリストミして迎へ素派らしい素質をもつてゐられただけに、先生や腹乃女史の悲しみは傍で見えるのもお氣の毒で全く慰めるのに言葉も無い次第であります。大朝、大毎をはじめ各新聞は筆をそろへて、その訃を傳へ各知名の人達からは弔電、弔辭、悼句の多くが寄せられました。告別式は二日午後一時半から三時半まで鳴尾の自宅で執行され多數の人々が會葬されました。病中の令嬢、令息達が抱かれたり、かゝゐられたりして焼香されたり、受持訓導が附添つてクラスメートの代表者三名の焼香なごいづれも涙のたねならぬはなく先生夫妻の胸中をお察してたゞく暗涙に咽ぶのみでありました。告別式當日參會された本社直接關係者の芳名は

柴谷柴舟 吉田清 木村半文錢 福井運 岸本水府 藤里藤園 太田徹底郎 都藤冷笑 水谷鮎美 駒井美の作 三好革郎 同夫人久美子 藤本卯之助 同夫人八重子 庄萬よし 塚崎松郎 林田馬行 安井ひろし 太田朝陽 喜田飯山 井上刀三 横田眠聲 高橋かほる 黒木葵豆 橋本二柳子の諸氏等でした。葬儀委員長は桃谷順天館廣告部長長野晴濱氏委員としては同廣告部の下戸億史氏その他の同人側では橋本二柳子、庄萬よし、塚崎松郎、三好革郎、林田馬行の諸君でした。順次焼香の後午後四時靈柩車により出棺、大庄村火葬場にて茶毘に附されました。左に各名流諸家から寄せられました弔電悼句を掲げ尙御香資を賜はりし方々の御芳名をも列記し主幹に代りてその御厚志を謝する次第であります。(順序不同)

社會評論家	高島米峰	社々々々	生方敏郎
二科會員	小出楢重	神戸通信社	大塚銀次郎
大阪朝日新聞社	大道弘雄	法學博士	岡田朝太郎
桃谷順天館	食滿藤吉	「川柳人」主宰	長野隆太郎
有恒俱樂部	川村花菱	大日本雄辯會講談社	井上劍花坊
劇作	家		
乘誓寺	福井喜三郎	書	阪井久良岐
大阪高商教授	村上信子	冰原	藤谷崇文館
大阪朝日新聞社	赤井清司	群像社	田中五呂八
白崎潤藏	森田一二	拍子木川柳社	みちのく吟社
小笠原顯	尾形八重	品研究	荒木京之助
渡島川柳社	龜井花童子	川柳研究所	麻生福太郎
西田當百	島田良之助	肆	廣川番翁
堀朝よし	佐藤元吉	宇治田眞吾	山本清三郎
鳴尾小學校	山田順平	下戸億史	宮男
一學年白組一同	柳川洲馬	時井源太郎	
東北川柳社	大谷五花村	森田輝翠	
淺井五葉	柳川洲馬	平野惠助	
村田關坊	大谷五花村	時井源太郎	
	美谷と衛生社	森田輝翠	
	大阪時事新報	時井源太郎	
	齋藤松窓	時井源太郎	

川柳二葉會	新密教社	土橋菊松	河盛益太郎	公立社書店	西田竹治	兵藤世平治	中西久郎	吉岡鳥平	中京川柳社	高寺光造	長野類次郎	本田溪花坊	竹田蘆穂	辻井良之助	金宅志郎	天満宮社報部	橘良之助	福田山雨樓	増井岩吉	細谷夢水	佐々木默閣	小田柳一路	廣島笑人	森山子	鷺田南耕
武田彩霞	松田兼之助	藤澤廣造	林淺治郎	杵屋彌七	杵屋七美佐	富樫木人	白石維想樓	河原みよ	大曾根吉兵衛	門田博助	今津作太郎	西島〇丸	原史風	佃吳服店	花井吳服店	大久保大夢子	山本秋晴	板野祐三	吉川啞人	上野直吉	牛窓屏三呂	長尾衆三郎	松本助六	德田双柳	久保菊子

山根謙孝
西垣松雨
長澤芳太郎
古川藥局
追悼帖
ナクナツタアサフクン
一ネンセイシログミ

ツツシミテイタムハナキツルタロ
花木天平
イチデクモキツトコノナツサビシカロ
西本三笑
キカノカナシミヲイタムモンタ
相元紋太
イタズラノアシゲニサレシヤナギノメゴロ
北山悟郎
アアロンチャンノシヲイタム
岩崎柳路
ロンドンクンノセイキヨヲイタム
矢田右大臣
▲悼句
ロンドンへ行つたか小さい魂よ
つれは皆戻つて居るに日暮れ前
大坂夕刊新聞社馬場蹄二
長い短いクレオンが残つて
醫學博士小酒井不木
一枝の莓はみのる日を待たず
法學士片山雲雀
片假名の清書の遺墨いたましや花岡百樹

俳を名に立つ霧の隔つるよ
 餘寒いご身にしむ朝を旅に立ち東魚
 天國の方へ童 謠消 ぬだま川柳社 住く 夢遊
 花ご見せて忽ち消 ぬだま川柳社 住く 夢遊
 おやつ時ふご死んだ子の癖思ふ
 さわがしいご怒鳴た父が思はれる
 はりかへに死んだ子供の清書が出る
 口笛がそうかごふつご立つて見る
 見ぬ人の死へもはつきり 洋 畫 家 森田ひさし
 九ツで死なせた親の心 持 金 津 穂 波
 丹精を藏ふたまゝの圖 長 崎 柳 秀
 春寒う地藏和讃が身に 染 見 光 路
 家内中一人足らない膳に 向 小 川 舟 人
 死の面猶美しき小さ 山梨日日新聞社 篠原春雨
 弟の君に淋しい日 曙 日
 柳の芽伸びんごするに子は逝けり 青砥不二綱
 神の子にされて諦らめ強ひられる 久田 狂水

砂手本さぞ勵むらん
 名ばかりの春にマントの襟を立て 關本雅幽
 悲しきはあまりに早し 謠 ぬだま川柳社 岡部美州
 父ちゃんご呼んでくれそな襖あき 久世一路
 眼に觸るゝもの皆恨み多い 若林吐露樓
 死んだ子の足袋へ寒むそな穴をめけ 大島 濤 明
 ドタバタミ騒ぐ子供が一人 減り 國 子
 又しても親を泣かせる 玩 具 箱 五 郎
 淡雪軒 零 哀 止 ま ら ず 蝶 五 郎
 白梅を手向けて思ふこご多し 俳 人 中 野 三 允
 死なさしの夢をかたみに泣いてる 池尻櫻ン坊
 器から器へ移す水の量 蛭 子 省 二
 春いまだ寒し西風雨を 呼 川 上 日 車
 罪のない心のまゝをふびん 三條東洋鬼
 亡くなられたご思はれぬ空暮れかゝり 小田 夢路

御燈明眼鏡くもりて座してゐる(先生へ)

悲しみへ矢張り朝日は流れこみ(奥欄へ)

新佛母をこの世にのこしたり(同)

しかつてゐたいたづら書のもつゝ欲し(同)

結氷に凍てし魚を見るにさへ水谷鮎美

凍蝶や垣根ひそかに日をはらみ

うす墨で書くも悲しい手紙なり

親星を放れ子星の闇に消ゆ大阪今日新聞社末田未燈

神様よ何故ロンちゃんを伴われし

ロンちゃんにみんな取残されたやう

天國へ行つたあさへ清書が居き

靈あれば泣け遅日莊の段椅子塚崎松郎

級長の焼香にみんな下を向き

氣が勝つたまんまの顔でもう醒めず

全てみなロンちゃん顔に見ゆる今日庄萬よし

莓摘み今年見ない元氣な子矢田右大臣

悲しくもまた頭数かぞへ見ぬ(路郎師へ)

膝の上軽きが淋し炭をつぐ(同)

今日からはもう學友が呼びに来ず駒井美の作

林田馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

同馬行

淋しさは英語で語る兒に死なれ(師を想ひて)

書齋からまだ聲すなり親心(同)

出迎に淋さ迫る父さなり(同)

こごもの時間に一人見ぬ淋しさよ酒井駒人

死の影をいふにあらねぞ神々し岩崎柳路

お察して仰けば雲がちぎれてる檜山千代二

うすれゆく寫眞もわが子なりけり竹内多聞

橋本二柳子

愚息ロンドンの永眠に際し御

鄭重なる御弔辭並に御香奠を

賜り難有奉存候一々拜趨御禮

申可述筈の處乍略儀以誌上御

挨拶申上候敬白

昭和二年三月

阪神沿線鳴尾

同麻生

同路

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎

同乃郎



ロンちゃん之死

太田 徹底 郎

二日の午後三時が鳴つてから間もない頃であつた。遅い晝飯を済ました私は、またもこの炬燵へ来て、蒲團の匂に人生觀さいふ様な顔るや、こしい霧の中に包まれて川柳になり相な想が頭をかすめ去つたりおもむろに湧いて來たりして居る時でした。

『お父さん——はがき——あのうロンドンいふて書いてあるけきな——』七つになる私の一番末の女の子が郵便屋から葉書を受取つたのである『ふうんそうか持つてお出で』私は笑ひ乍ら答へて置いて考へた。まだ學校へは行つて居らぬけれど、片假名だけは充分知つて居る筈の

子、何を讀み違へたのだらうか？ ロンドンなんて私達ミ縁の遠い文字だし……エエロンドン……そうだ鳴尾のロンちゃんだ。ロンちゃんに何かあつたのだ。二三ヶ月ほど前女中に上つて居た小母さんから此頃よく病氣にかゝりはりますこいふことを聞いたことがあつたので、彈かれる様に立つた私は、まだ硝子障子をガタ／＼開け兼ねて居た子供から、葉書をひつたくつて見るに、昨日午前零時四十五分にロンちゃんは死んだこいふのだ。四ヶ月ほど前に見たあのコロ／＼した體や、はち切れ相な頬の肉、それから今でも目につく丸い大きな鼻をして智恵の結晶

の様な眼なごは一體どうなつたんだらう？

告別式は一時から三時までこある。今から鳴尾まで行けば四時は廻るし間に合はないこごは分り切つて居る。(其時既に三時半ではあつたけれど三時云へば四時になるこいふ勝手な判斷を下しても) 葉書の遅かつたこごなきは問題でない、済まぬこごじや取返しのかねこごだと思つたが兎に角下駄じや帶じやミ家を飛び出して遅い電車に腹を立てながら遅日莊へ走り着いた時には四時は少し過ぎて居たのだらう。昔風のあの大きな障子を開けて見るミ中の間ミ座敷ミを開け放して一杯の人が來て居られた。ロンちゃんはんはほんに死んだのだ。そしてそのなきがらさねももう此家にはないのだ。思ふに大勢の人の顔が霧の中にほんやり動いて居る様に見えた。しかしそれでも路郎先生だけはつきり見出したので御挨拶だけはしたがうつむいたまゝ、先生

……云つた切りさうしても次の言葉が出なかつた。先生が何やら云ふて居られた様であつたが聞ききれなかつた。

漸く御焼香を済まして、皆の間へ坐つて同人の卯之助さんや美の作さんなごの世間話を聞いて居ても一向その氣になれず、その間も私の頭の中では稻光りが廻轉する様な速度で在りし日のロンチャンが浮んで来る。

あの子は先生が一番可愛がつて居たのに『裏へ来いソラ無花果を取つてやろ』といふ句もロンチャンの爲めに生れた様な氣がする。

二年ほぎ前の夏、今私が居る此の中間へ格子越しに淡い夕陽が差し込んで居る時であつた夕飯を済ました家内中がこゝへ集まつて賑やかな團樂な空氣が笑聲と共に室に溢れて居た。ロンチャンのお祖父さんの蘆村さんは子窓の所へ腰をかけられて姉さんの純子さんから算術が何かの質問を受けて熱心に教へて居られたと思ひますが、男の子のロンチャンやア

トさんはさうしてそんなことに頓着出来ませう。お母さん（同人葭乃女史）ミヅエニスの船唄の合唱をして居ましたが終ひの方になるにそれと嫌になつたのか態ミ調子はづれの高い聲で唄つてお父さん（主幹）までが折角仲間に違入つて居たのに、それを混ぜ返して置いて私に角力を取らう云ひ出した。

子供ミ角力を取つて喜ばせるコツは子煩悩だミ云はれて居る私はかなり自信もあり興味も持つて居たので『ロンチャンには叶はぬだらうな』といひながら、一番最初は私が見事に負けた。その次は極めて上手に勝つたのであつた。クル／＼ミ立ち上つたロンチャンは笑ひ乍らこういふのであつた。『今度は僕が勝つ番です、ね、徹底郎さんはその次に勝つ番ですなア僕ちやんミ分つたある、さあやりませう』ミ笑ひ乍ら促されたけれど拍子抜けがしたので止めた。よもやミ思つて居た八百長がすっかり見透かされたので私は、恥しい様なおかしい様な氣になつて

他の人へのてれかくしに二階へ逃げたのであつた。それから後もロンチャンはもう角力を取らうミは決して云ひ出さなかつたが、こゝにいふユーモラスなそして川柳味にたつぷりな言行は何度もあつたがその度私は將來はお父さん以上の川柳家になるに違ひないと思つて居たのに惜いミさだ。それからロンチャンにはいつも天の一角を凝視するこゝろ風な姿を幾度も見たことがある——自然に向つて何か求めて居る様な——莢豆さんミ一度そんなことを話したこゝろがある様に思ふ。

その莢豆さんも風邪を押して今此席へ見られたけれどロンチャンのそうした面影はもうそこら邊をいくら探しても見られない。悲しみの極みである。

子煩悩ガツタン／＼して暮し

この句主の路郎先生の心も察するさへお氣の毒である。何ミいふ事なしに氣がすゝまぬので皆の人よりもお先に失禮さして貰つて歸つた。

募

集

句

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬 行 生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
(五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
好きなタイプの人 (九) 自信の句 (一〇) 川
柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌
ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(一三〇) 篠村 力 好

(一) 篠村藤三郎 (二) 力好 (三) 二葉、双葉
嫩、醉庵庵、月碎、京二、豚兵衛、川柳
情歌、發句、俳句、俗語等に用ひて居り
ます、まだその外に二三あります (四)
大阪市西區西長堀南通り一丁目一 (五) 明
治十九年一月廿一日生 (六) 座員、七 澤山
ありますので一句書く事は困難です (八)
人形遣ひの文五郎がこなすお三輪の様
型の女があれば…… (九) 長生して吐くつ
もり (一〇) 魚、ザアイオリン、ハーモニ
カ、三味線、酒釣、漱石の本、博多人形
畫寢、アイヌの刺繍 (一一) 只今の處あり
ません (一二) 虚榮心の強い男女、オート
バイに乗る人、蜘蛛、ゴツカブリ、(一三)
今を去る二十有餘年前、月日は覺えませ
ん。

(一三二) 渡 邊 三四四

(一) 渡邊三好 (二) 三四四 (三) 田子浦人
(四) 静岡縣吉原町三九〇 (五) 明治三十五

疊

佳 作

意見聞く足の甲には疊の目 宅志郎
里の母家賃ミ疊聞き直し 一 根
油虫疊へ来るミちミ迷ひ 聞 路
梯子から見るミ疊に光るもの 青影子
寝る時は疊が見ぬ 木賃宿 櫻ン坊
二人へ嬉しく匂ふ 青疊 古岐柳
疊がへした夜は他所へ泊つた氣 鐵 洲
生活をはつきり疊見せてゐる 一 笑
疊新しい匂ひの蚤取粉 鎌 月
青疊跳で降りたのを見つけ 一 笑
疊替した事里へ書きそへる 醉 夢
來年が明日に迫る 青だたみ 源 坊
古疊はつきり春の陽に射られ 無 心
叱られる度に疊の赤インキ 叶 露 樓
疊がへして一通り歩いて見 鐵 洲
結納が目出度く済んで疊替 一 風

鏡

叱られて出るにも鏡そつと見る 龜 珍
映るもの不圖見度くなる歳に 進 一 郎
秋空を見せて 鏡は誘ふ様 鎌 月
大法を鏡の前で踏んで見る 三 笑

前田雀郎

選

表がへした夜襖が古く見 黒蝶子
疊替母が氣にする足の裏 句 若
宿直は疊の上で何か切り 耕 水
疊がへする氣にもなる大掃除 穗 波
新調の服で疊をきたながり 吐 露 樓
子澤山疊の見ぬ程に寝る 豆 蔓
除障したその夜疊に寝そびれる 大夢子
改築に疊の室が二つ減り 琴 香

五 客

豆一つ疊の上を廣く逃げ 青影子
表がへさてミ大家がやつて來る 龍 造
經すんで元の千疊敷さなり 溪 象
疊屋がもう一枚になつて暮れ 濁 路
蠅船を覗けば疊ばかり見 聞 水
(人) 敷きかゝる疊やつぱり破れ出 濁 水
(地) お隣の疊ミ古い大掃除 萬 有
(天) 青疊丹前一人坐つて 松 雨

麻生葦乃

選

何處ですミ齒醫者鏡を頼ばらせ 玄 水
丸刈を止めて鏡を買つてくる 醉 郎
一しきり笑つて鏡貸してやれ 杏 堂
なやましい日も鏡臺で紅をさし 露 斗

鏡臺へ蜘蛛の巣がはる子澤山 芳雪
ねじ向いて鏡の寫す蟹の出來 眺太郎
眞榊もあつて鏡の神々し 光路
理髪屋は鏡に向ひ世辭を云ひ さゝ舟
人生の晴れを鏡に送られる たかね
大部屋の鏡で子役顔が出來 秋晴
髮結は鏡の中へ話かけ 溪象
自惚へ鏡時々嘘をつき 町二
髭剃つた後の若さを鏡に見 笑人
兄様は髭剃るだけに要る鏡 柳造
鏡屋の一つ一つへ我が姿 豆蔓
ごうしてもしまひは合せ鏡なり 花蝶
ホネムーン鏡のような海を行き 龍二
動くものあるは我なり鏡の間 籬楓
男の兒鏡をみるさ見得を切り 柳哉
鏡臺の底に剃刀光つて居 一徹
我顔を疑ふ様な鏡なり 朱唇子
髭を剃る父に末つ子鏡見せ 翠峯
鏡臺へうつる樂屋の華かさ 美髯公
物干を鏡の前できたながり 山月
水銀のはけた分だけ顔がかけ 源坊
鏡臺へ赤んべをした顔が來る 童翁
鏡見て居る女あり發車前 無限
生活の瘦を鏡の中に見る 無心
見直して見ても鏡は偽らず 志郎
手鏡を手帖のやうにのぞいて居 天溪

鏡臺へまだ向いている荒い肌 晴嵐
スーブンの様な鏡を齒科醫出し 鐵洲
新調を響るさ鏡の前に立ち 一風
オルガンをはなれて柱鏡へ來 耕水
神鏡に神々しくも初明り 句若
化粧室大姿見が冴々返り 明荷
歸郷して母の鏡で結ぶてゐる 青影子
正直にうつる鏡がうらめしい 村句茂
散髪屋鏡に閑なニキビ取 拔天
鏡なき見ず梳髪の儘の母 のほろ
猫背して剃るに鏡を覗きこむ 濁水
鏡台の中へ末つ子笑ひに來 古岐柳
鏡見て床屋一日日を暮し 三日坊
鏡台をはなれてからのあでや 彩秋
衣装部屋ズラリ鏡並んで居 五六八
手鏡をたゝむさ鬼灯鳴り初め 大夢子
妻の留守姿見のきれ重うたれ 千鳥
もう一度鏡へ覗きながら待ち 櫻ん坊
自惚れて鏡台を立ち 同
墨つけた方が鏡を見せてやり 同
妬たましう鏡の前の姉を見る 琴香
有りたけの表情鏡知つており 同
幕間に我おくれじさ鏡が出 突支坊
外出の鏡へひまの入る若さ 同
鏡台を嬉しい顔でかたづけ 柳秀
髮結ふてやれば鏡の前へ行き 同

年八月三日生(六)藥種商(七)「南無女房乳を吞ませに化けて來い 古句(古句現代句共に數限りなく有之候)(八)下町風の美人特に桃割が好き(九)未だ勉強中にて自信の句まで無之候(一〇)義太夫(但し唸らば近所より苦情請合(一一)未だ獨身者の香氣者にて縣下柳人よりスボラな三四四三有難き命名有之候、(一二)無(一三)大正七年頃靜岡市に(當時愚生同市に住居)賤機川柳會有之(毎月例会を催し居候それに三三回出席(九月十月頃)當時は川柳さのみ思ひ居り候もそれは狂句屋の會合にて候、是が動機と相成り大正八年六月「大正川柳」を購讀今日及び候。

(33) 高木夢二郎

(一)高木正規(二)夢二郎(三)潮鳴閣(四)北海道上磯郡内村字小谷石番外地(五)明治三十三年六月一日生(六)未來の大將、大臣、大實業家の養成所係、毎日唄つたり刎ねたりして日が暮れる(七)日の方へ向きたい花の願なり(夢村)物足らぬ日も一日の中に入れ(信子)太陽を真ん中にして皆な生き、壽島(八)栗島すみ子の愁を含んだ横顔、優しくて而も自己意識のある女(九)流れ行く中に無名の墓ばかり(大正十一年作)(一〇)なし、強いて云へば活動寫眞と讀書(一一)一人あり、美人にはあらず(一二)陰口ばかり云ふ奴(一三)大

幕あひに一はけ當てる棧敷の伎同

佳句

買ひさうな客へ帽子屋鏡見せ
刺刀を持つて鏡を借りに来る
鏡屋の鏡にうつる人通り
満足な顔で鏡をかたずける
鏡臺になつてはたきの手を休め
鏡臺へ座敷斜めに廣く見ぬ
眼と鼻と寫して使ふコンバクト
その顔で鏡を見るに取合はず
鏡臺にたしなみの品みんな乗せ
鏡臺に瘦を見て居る病上り
肩越しに覗く鏡は眼で笑ひ

秋晴 萩磨 黒驪子 柳陽 舟々 昌子 醉夢 萬よし 彩秋 柳秀 光路

靴

◇夢遊

ゴム靴の底から素足見えすぎて
白靴を穿いて嬉しい人に逢ひ
齒の抜けたやうに深ゴム口を
長靴は雞魚場で知つた顔馴染
將校の靴も汚れて歸つて來
轉任のけふは靴をも磨いてる
下駄箱の親子の靴を出しちがへ
若草に投げ出してゐる白い靴
爪先で立つてるやうな婦人靴
靴づれが古兵の煙草買つて來る

古岐柳 其象 柳陽 のほろ 琴香 黒蝶子 濁水 句若 一風 青水

朝のいき鏡へはいて家を出る 鮎美
鏡臺へ猫立ちごまり 同
ごもすれば鏡天井向きたがり 一笑
鏡だけ嫁の素顔を何時も見 同
(人)一と掛けの衿にも鏡煩ら 光路
(人)笑はれた顔を鏡へ來て笑ひ のほろ
(人)大鏡歩く姿も寫して見 白鷗
(人)果物屋鏡に無理な量をみせ 其象
(人)湯氣の立つ体鏡へ寄こ來る 一笑
(地)別れる迄こゝに鏡が部屋 山雨樓
(地)逢行く氣が姿見の前に立 與詩夫
(天)浮氣また鏡の前で叱られる 聞路

橋住 夢遊 共選

宿營の町靴音がしきりなり 穂波
階段を小股に靴のつゝましく 天溪
連日の苦悶に靴が汚れてる 無心
擔架から油まみれの靴が見ぬ 志郎
お茶代の効め編上げ光つて 源坊
校長の靴が一番古い型 醉夢
女關に靴見はずカナリヤの啼く 大夢子
幼稚園うれしい靴をはきちがへ 柳秀
編上げで故郷の驛のホーム踏む 天津美
靴をはく指の敷島消にかゝり 櫻坊

正四年二月。

(1883) 高橋手腕坊

(一)高橋重由(二)手腕坊(東村其他文藝
へ用ふる號は數多あつて數へ切ない)
(四)福島縣東白川郡棚倉町字北町一〇二
(五)明治四十二年十月十日生(六)藥業店
員(七)紋太はんの句「一人子の何の苦も
ない便を垂れ」其他路郎氏馬行氏水府氏
等に澤山あり(八)細つそりこ優しみのあ
る七三風の女：こゝうした女にあこがれて
居ます(九)自信の句は目下製造中(一〇)
川柳以外には音楽なら何でも好き(但し
きくだけ)讀書、思索(一一)徵兵検査に
まだ二年もあり家庭生活にひき付けられ
ません、その中にそんな事を考へる時も
來ませう(一二)自慢、モダンガールの耳
隠し等はなやかなもの一切嫌ひ(一三)大
正十五年二月東京藥事柳壇へ「運轉手女
給ばかりで夜を走り」が處女作です。

(1884) 北澤袈裟雄

(一)北澤袈裟雄(二)高峰(三)高崎柳子
(四)長野縣上高井郡須坂町七(明治卅八
年九月十日)(六)倉庫會社員(七)川柳雜誌
川柳塔の句又近作柳樹の句(八)頭に浮ん
で決渾此れを表現するに迷ふ、但女ら
しく居渾を附記す(九)自分の作句は皆自
信あれき人は認めてくれず自惚も挫けて
しまふ(十)陸上競技、歌留多、園遊、讀

薄暗い灯に古靴の並べられ
新調の靴へ課長の皮肉なり
靴さ下駄差別もせずに並べられ
ちさ容か頼れて靴は足に合ひ
夏休みこの里にして女靴
新しい靴で誘ひにこんで来る
外交員その精勤を靴に見せ
階級をはつきり見せた靴の色
靴音もなく遙拜の十一時
測量の指にゴム靴動かされ
ボックスの靴市役所へ出てる
あすの日の嬉しき運動靴を買ひ

豆蔓 柳造 秋晴 光路 一根 跳太郎 醉郎 千鳥 萬よし 山月 露斗 一笑

アメリカの事も靴屋は知つて
鳴り皮も入れて靴屋の値が決り
登山靴案外瘦せた人であり
長靴を倒して犬は外へ出る
赤靴に世間の垢が染んでくる
泥濘をゴム靴ばかり威勢よし
たまに穿く靴はうれしい日なり
ゴム靴の足がふやける暖さ
勝手口靴貫ひうさんさうに見る
改札の動かぬ靴へたそがれる
靴の皮さうのかうのさ若旦那

青影子 松雨 鮎美 醉夢 山雨樓 大夢子 彩秋 町二 秋晴 光路 其象

班長の靴タンボを踏みしちり
検閲の後ろも通る靴の音
靴屋ふさ大將も飯打ちまほか
日の丸の旗靴が鳴りく
人さろ靴を日那さ呼を靴磨き
(地)只今の運動靴の早い呼吸
(天)靴磨き犯人だつたさは知
(軸)逢登日の好い日和靴が鳴る

青影子 萬よし 濁水 吐露樓 童翁 一笑 山雨樓 夢遊

靴脱いで寶物を観る群になり
登山靴手入れの出来ぬ程いたみ
こまかくも靴は古びるばかり
靴音に禪の畫の夫人なり
特急に間がある靴を磨かせる
いゝ天氣ですな女房靴掃除
靴磨きのまんま上がれるの
夏休み此里にして女靴
靴さ下駄差別もせずに並べられ
靴みがく腕にも寒させまるなり
姉の靴穿いて五六歩姉の眞似
昇給の日は靴音も高く鳴る
靴をはく背をやんわり叩かれる
軍隊の兄が戻つた靴の音
靴蹴のさほり砂道歩いて見
スポーツに靴からあがる砂煙り
聞きなれた靴音に妻針を止め

柳秀 露斗 龜珍 一笑 秋水 眺太郎 一 根 秋晴 花蝶 町二 笑人 櫻坊 醉夢 翠峯 山月 源坊

書等最近園基、短歌等を初めり(十一)女
護島を思わせる工場町に住めざ未だ選定
せず(十二)夢の話し 混雜、借金取り、
(十三)大正十四年秋新聞柳壇へ投稿が初
めなり。

(23) 森 半 疊

(一)森立名(二)半疊(三)歌に白崖、森野
白百合、南の人、俳句に碧盧郎、白崖、
翠哥、川柳やへなぶりに白百合、達磨等
を併用せしが今は川柳及雜誌に半疊其他
は白崖のみを用治(四)南滿洲本溪湖大和
町(二號)(五)明治廿二年十一月廿一日薩
南坊津に生る(六)南滿洲鐵道株式會社販
賣課職員(石炭鐵を取扱つて) (七)暫
の聲なかりせば非業の死色男八つ手の陸
にかくされる(八)扇雀を娘形にした顔の
女、芝居で見たり小説で讀むのには源之
助や梅幸が演ずる江戸張傳法肌の女、通
夜物語の丁山のやうな意氣の女、黒襟を
かけた浪花の町娘もだらりの帯をしめた
京の舞妓も、好きな女はあけきれない
此頃はやりのモダンガールもやらには未
だ共鳴せず(九)これも自信あるつもにな
るもこれこそ銘うつ自惚なり(一〇)短
歌、俳句、繪畫、讀書、芝居、旅行、擊
劍、野球、園藝、將聯、珠麻雀等々ち
多過ぎてこれもこれものにならず、麻
雀だけは自信あり、(一一)三十才短歌
麻雀さ小生に共鳴趣味をもつ(一二)響
きさ見得坊さ意者さ復雜にするこも嫌飲
食物では煙草だけ、さいふでは酒好きで

連日の苦勞に靴は汚れて來 無心
宿營になつて 町内靴の音 穂波
登山靴案外 瘦せた人であり 鮎美
新調の靴ぬかるみを飛んで來る 放我
靴墨が手につく事も嬉しがり 耕水
鳴り皮も入れて靴屋の値が決き 松雨
國道へ出た長靴へ砂埃り 青影子
將校の靴も汚れて歸つて來 琴香
ゴム靴の穴から素足見ゆすぎて 古岐柳
ゴム靴を穿いて息子に戀もなし 其象
トンネルへ來るご靴音よく揃ひ 萬よし

靴磨き犯人だつたさは知らず 山雨樓
金持ちさいふ程の靴穿いてゐる 同
佳句
モーニング靴の汚れの目立こそ 柳秀
チト容か頼れて靴は足にあひ 光路
靴カバ―はかす男を見まじさす 山雨樓
檢閲の後も通る靴の音 萬よし
日の丸の旗靴が鳴り靴が鳴り 吐露樓
朝云云氣分へ靴を穿きしめる 露斗
土ついたまんまの靴でよく稼ぎ 其象
靴はいてからもうくれぐれ 萬よし
青影子

謝地震御見舞

川柳雜誌社同人一同

七日の地震は、かなり猛烈でした。東京の二の舞かと思つてウンミ脅かされましたが損害といふべき程度でなかつただけは不幸中の幸です。まづ其の概況を申上げれば、本社二階では洋細短冊掛などの落下、書棚の書籍七八分は投げ出され、座敷一面に灰と砂（これは壁の砂と火鉢の火を消した時の灰神樂のため）でザラ／＼となり、下の座敷では電燈が天井をうつので、もう二階が落ちるだらうと思つたさ落ちついた蘆村翁の話です。雨戸の突支棒が眞ッ二つに折れ、外部の壁は少し龜裂を生じある部分は崩れ落ちました。葎乃は病二兒を背負ひ、且つ抱いて後庭無花果の下に避難しましたが幸ひ事なきを得ました。ロンドンの初七日が昨日すんだばかりで、まだ神經が變態にあつたので大變脅かされた譯です。他の同人は何れも無事ですから御安心願ひます。早速御見舞下さつた各地の柳友諸兄の御親切を謝します。（路）

はなし但嫌にはあらず（二三）趣味をおぼつたのは明治三十九年頃、兄が芳華子に就いて、讀賣新聞の念仁（後に木念人といふ）の傘下に帥せられたのは明治四十一年頃初めて句會に出たのは大正七年夏、路郎氏に伴はれた瑞の坊に於ける番傘の例會

（三）津田 耕水

（一）津田喜一（二）耕水（三）俳句を作り初めし頃より佳草、夢柳庵の別號あり、川柳に手を深めてゐる（四）岡山縣淺口郡常盤町を作用してゐる（五）岡山縣淺口郡常盤町（本宅は淺口郡黒崎村字本村一ノ番地金光驛より沙美海水浴場へ行く道端、白壁に一せき大きな文字が書いてある）にあり、商賣の都合上玉島町に借家住居をしてゐますが、關西川柳社の事務所としてゐる（五）明治三十四年一月六日黒崎村に生る（六）生魚商：仲買兼小賣：祝祭日には休めない商賣です、ちつぽけな本屋も初めてゐます（七）人様の句は皆好きです（八）丸謡（九）これさいふ自信の句が見付からず（一〇）自轉車競走、狩獵魚釣、近頃習ひ初めた尺八、三味線、一（一）今は無しですが今年中には一人だけは有るにさまります（二）嫌ひなものは無し（三）大正九年八月頃山陽新報紙上に乗本泰秀氏（先の佛々郎）が募集したる無苦樂川柳會の課題吟へ応募して正村焦醉氏の選を受け又會場へ出席したのは十年の四月頃岡山川柳會が岡山公園外で催したのが初めてです

價值批判の一問題

中野三九

余は醫藥衛生に關する古川柳の評釋を試みて居るが、左の如き問題が起つた。

生藥屋木賊のそばに兎香

(三九) 兎香は線香の銘である。昔の藥店がよく表はされた。此句は天保年間に詠まれたもの(柳樽二五篇)だが「兎香」なる線香が今日何うなつてゐるか、またいつの時代から賣出された等に至つては

他日の調査に待たねばならぬ。尙此句が天保年間のものとして珍らしく純客觀の描寫たるを見通してはならぬ。

川柳が狂句に墮落し、俳句は所謂月並俳句の跋扈した時代にして斯の如き作風は歴史上特種の藝術價值を存するのだ。

(久良岐) 木賊と兎と文字上の對照をした所が狂句である。

(三九) 久良岐兄の説に依つて狂句の趣向の想ひ及ばぬところに伏在するこゝが會得された。けれども所謂生藥屋の店

の客觀描寫すれば今の説の如きを認め譯にいかぬのだ。此種の矛盾には屢々遭遇する次第で從つて價值批判が面倒になる……成立の動機からは唾棄すべきだけれども左様な穿鑿立てをせねば佳吟なる(此句がこれに適合するか何うかの意見は讀者に依つて異なるであらうから姑く措き)所謂「噓から出た誠」も變だが、余は此句に就て意見の出たのを機會に、宿題として其取扱ひ方を研究したいと思ふ。

「木賊のあつもの武を磨く御吉例」が徳川幕府正月元旦の儀式に供する兎の吸物たることなから推しても當然木賊と兎との配合に連想せねばならなかつたのだが藥業者の店舗について深き關係を有する自分としての立場から純然たる客觀描寫に見てしまつた兎忽ちは反省せねばならぬが、動機は非美なるは之を認むるにしても、それは時効にかつたものとして(不問に附するこゝに譯でなく飽まで指摘した上に)即ち追窮することだけは止

めて同情ある美的鑑賞を試むることは絶對に不可であらうか、それもいかん直に排斥するは古川柳の第一美的氣分から至極尤もな次第であるけれども狂句頭の狂句扱いでない扱ひ方が別にある場合の問題だから、一應考慮せられたいのである。(二、三、七)

隨筆の力と卷莖

安川久流美

牡丹雪のチラ／＼降つてゐる時は牛のまつ毛にでも消へ、人の唇にでもさけるやうであつたが寸から尺、尺から丈に近い大雪になつてからは、もう木で造つた小擲板す役に立たず、スコップすらも齒がた／＼遂には鐵叉はこれに類似の鋼鐵機具で起すやうになつた。

この近年まれに見る大雪に遭遇して人間の自然には充ち得ない弱さをツク／＼感ぜられた。夫れと同時に、團結力の如何に強いものであるかをも思はせられた。一茶の句でないが、甘さうな雪がふ

うはのくししてゐる間は別になんとも思つてゐないが、その雪が積りつもつて人間の造つた家屋に被害をし、遂には無惨な死人をさへ出来るのであつた。

少し位積つた雪は田舎に綱繩の杓子やうなものに除雪してゐた事を、少年の頃淡い記憶してゐる。それがスコップすら間にあはず、凝固したものを蹴にかち起すやうであるから、その團結の力も又恐ろしいものと言はねばならない。

だから雪と同じくわれ等趣味の團體も社會的に見せられるか否もこの團結力の如何に依るものであらう。川柳も文壇からは繼子扱ひにされてゐるのも、別段不思議ではない。この團結力に幾分缺けた點があるからだと思ふ。

◇
甲の職工が乙の職工へ巻煙草を一本くれこいふ。心よく出したのは朝日であつた。

甲曰く『これは絹の羽織でなく、木綿だナ』こいふ

ミ『木綿は冬向きでよからう』を返した。

何でもない會話のやうではあるが一寸面白い敷島のスヂのあるのを、結にたこへた所が一種の洒落である。

巻煙筋のないのはケチに見ねこでもいひたい。一職工の符牒の如き會話の中にも川柳味はひそんでゐるのだ。古句に

木綿もの見るミ吹つく奥の狎
こかいふ句があつたやうに思ふ。この木綿ものは下級の人を指したものであらうが、古句の中には斯うした代名詞的——即ち符牒の文字が交つてゐて、現代に難解に苦しむやうな研究者もあるやうだ。之等は全く徒勞の方こいひたい。

(二月廿七日)

同じ作に就て

竹馬居主人

五番目は同じ作でも江戸生れ岡田博士の麥飯説は面白い御觀察だミ拜

聴至しました。因つて私も前から抱いてゐる卑見を述べさせて頂ます。此句は『同じ作』ミ云ふ處が生命で、そこに洒落が含まれてゐるのではなからうか。沿波學士の『やなぎ樽評釋』には『五番目だけが市中に在るミ云ふだけの智識で、五番目丈が江戸ッ子だミ云ふ軽い意味で、江戸生れミ云つたのであらう——江戸育ちミすれば難は無いな——その江戸育ちミ云ふ程の意味なんだらうよ』ミあつて生れを育ちにし得ミせば、更に同じ作がきかないのであります。即ち江戸時代の軟文學中に、親が五六人の子を産び、それを『アレは同じ作』だミ云ふ様に使つた場合があります。今日でも長男を静岡で次男をフランスで三男を大阪に産したりした折に『同じ腹でもフランス製さ』など申すは耳にするころ、これは同じ作の脱胎した洒落なのでしよう。五番目が上野にある事を、同じ作でも江戸生れささ、夫れが阿彌陀様であるから、淡い滑稽も出は致しますまいか。(こみいつに傳説に於ては柳樽研究拙稿参照)

南船場より

安井 寛

川柳雜誌二月號から掲載の『柳樽評釋廿四篇まで』は主幹路郎先生の本年度に於ける不朽の力作だけに、川柳界の根本的の仕事をこなし意義多いものさ大いに喜んでをります。古句をみよ、古句を研究せよとはよく先輩諸氏から承はるころだが、さてあの『柳樽』なり『武玉川』を突然繙いてみてもなんの事やらわからぬ難解の句にぶつかり、謎々のやうな氣持で尋常の苦心では判然としない句が多いのである。

また従來の通解類も多くは句に詠まれた事柄に拘泥して、句の出所とか考證にのみ重きを置いて居て、句の藝術的批判にまで及んでをらぬため、はたして川柳の神髓とも云ふべき味はひが何處にあるのかを知るに苦しんだものだがこの企てによつてはじめて古句に明るくないものにもはつきりさよくわかるように、平易に

批評解釋されるはまことにうれしい事である。

古句の研究によつて得るころは中々多だだが、まづ古人の川柳的手法の巧さに一驚する。今日所謂傳統派の錚々たる人々の得意の句も古句のうまさの前には頭があらならないやうな氣のする事である。穿ち得て妙、諷刺痛快といった領分では到底古人に及ばざる事遠きを思ふ事切なのである。

それからまた他の一面には、實にくだらない、駄洒落や惡穿ちに終始して殆んど藝術價値の低いものが多くある事をも發見するのである。それらをはつきり組上にのせて玉石を鑒別される事は非常に有益でその勞を深く多とするものである川柳は川柳だ。古川柳の埒外には川柳はないといつた偏見を固執される人達にも眞に『柳樽』が解剖されるなら『柳樽』が案外不備な寶典であり、玉石同架の玉手箱である事がわかる事と思ふのである。そうした點がはつきりわかつた上でい

よくわれらの進むべき川柳の道をつき歩まねばならないのである。

大正十四年一月松郎氏等の手で發行されて居た『灰』二號紙上に

缺できつてしまつた 日車

さいふ句について光太樓氏がこう書いて居られる『右の句について私は或る日、日車氏におめに掛つた際教へを乞ふたのである。即ち日車氏の曰く「私は川柳家として立派に自他共に容し認められてゐる。其の川柳家である私の吐いた句がなぜ川柳としての價値を云爲されるであらう。私は川柳であるに斷言し得る」云々びきられたのである。私は其の後熟考して見ましたが未だ得心が行かぬ。』

これは『缺できつてしまつた』さいふ句の言葉しか讀まずにその言葉の奥にある作者の川柳的哲學を味はないために奇異に觀じるのではないかと思ふ。

日車氏のこの言葉は實に意義深い言葉である、(無論このまきの日車氏の話よりは心中生意氣な位の程度での返事だつた

かも知れません。私自身もこの句が絶對的に佳い句だとも思ひませんが。

なぜ川柳家の短詩型の發表が川柳であり俳人の短詩型が俳句であるのに他の詩人が同じ短詩をつくつても、川柳や俳句とはならないか云ふと、それら作者のもつ人生觀なり哲學が、川柳的であり、俳人的であり、詩人的なるがためである。川柳家が童謡のようにみゆる川柳、俳句のように思へる川柳をつくつても決してそれらは童謡でなく、俳句でなく、川柳の一表現法なのである（これはむづかしい問題だから此事については他日論じたく思ふて居る）

雲雀ないたきてまぎれませうかね赤椿

莢 豆

これらは立派な川柳の一分派であつて決して童謡ではないのである。

古句の埒外にも川柳の領域はあるのだから古句の歩いた方面につき進む人も大いに結構である事は勿論だが、昭和時代の生きた藝術的香ひの高い川柳をも大いに

生んで行きたいものである。

（昭和二三、一八）

短詩時代來る

喜多 一二

（二）

さて筆をひるがへす。

かつて人類は科學を創造した。この科學

は今や人類を支配しつゝある。

横暴なる科學時代が來たのである。科學

時代は人類の不幸時代である。

科學時代はパンを追ひつゝ人生を浪費

して行く——消散さして行く爭鬭時代である。

『稼に追ひつく貧乏なし』の生活命

題が『貧乏に追ひつく稼ぎなし』に書き

替へられたる悲痛なる時代が科學時代である。

食ふために生きるか——

生きるために食ふか——

さらに……

食はんがために働くか——

働かんがために食ふか——

こうした思索さへ奪はれた時代が科學時代である。科學時代はこうした思索の

『時』を奪ひさらにこうした思索の無駄

であることを強いる。現代は思索を失つた懷疑混沌時代である。そしてそれが近

代的象徴である。

思索なきところに何物もない、端的な

利己的な瞬間燃焼があるばかりである。

だから思索を奪はれた十九後半世紀以後

民衆は、電車の中に立ち讀みし得る利己

的な藝術を要求した。それはつひに藝術

を捨て、生き得ぬ、民衆の生命的普遍の

立證でもあつた。思索を失つた時代の民

衆は、必死になつて思索の『時』を盗ん

だ……短い『時』を……そのものつこも鮮

かに現れたるものは短篇小説時代である

フランボオの出現であつた。今正に短篇

小説時代が來たのである。文學は時代

の反映である——日本に於ける文壇の短

篇小説時代は明かに科學時代の亂舞を——

訪問を裏書するものである。さらに文壇はより短きものを求めつゝ動いてゐる。

短篇小説よりコントへ——

コントより十行小説へ——

十行小説より三行小説へ——

三行小説より一行小説へ——

それはさらに『新しきエドカア、アラシ、ボオの出現』であり、小説の……散文の……没落である。今日文壇に見る十行小説、三行小説、一行小説はその型を散文に借りながら内容は詩である。あゝ散文は没落し短詩時代が訪れ來つたのである。

電車の窓をさばして見る蒼空に宇宙の深き悠久の神秘をうたひ、街頭を疾走する自轉車に宇宙の時の流れ——萬物流轉相をうたふ。

『一秒の詩』時代が來たのである。

短詩時代が來たのである。

私は今一章に於ける内的れいめいさ、

こうした短詩時代の訪問を深くむすびついたことを感じてゐる。

(二)

石川啄木がその短歌を人生の一秒の詩と言つた。

川柳は今や私の人生の一秒の詩ならん

んし、亦なりつゝある。

正宗白鳥氏は藝術の世界を『國家にもそのものゝの制律にも支配されぬ心の安息所』といったが、私の川柳も何物にも支配されぬ短詩王國の花園たらんとしてゐる。

あゝ、内的にも外的にも新しき短詩時代が來た。一二よ、自愛せよ。

(一九二六、十八)

撞球の事

矢田右大臣

初めて旅行した土地なごを歩いてゐる時、僕が一番先に眼につくのは、キューを二本交叉して、それに赤さ白の球を四

つ丁度旗竿に日の丸をつけたやうにして軒に釣り下げられた看板である。此看板を見るに同時に、僕は、グリーン色の羅紗に交錯する四つの紅白の球が、コツ／＼コツ／＼ミカち合ふ心よいリズムが、耳の底から湧き上がつて來る。そしてキュー持つて立つたまゝ球の行方を睨んで順番を待つてゐる人、マッセーなごをやつてゐる好いスタイルの人なごが、髭髯として浮かんて來る。事程左様に僕は撞球が好きである。が然し僕の句——球を突く事に極道腕が冴へ——は僕自身でないこゝ、僕は極真面目な男であるこゝ何より先にお断りしておく。

君は娛樂の内、何が一番好きかご問はれた場合、先づ第一に撞球を答へたいそれなら何點撞くかご問はれると冷汗が出る。例に依つて下手の横好きで最高百二十點より上がった事がない。今僕の知つてゐる川柳家で撞く人を物

色して見るに、娛知苦君の百點、肥後守君の百點、吾村君の七十點、一六草君の七十點、娛知苦君は清州の川柳會に出席した歸りに、おそく迄よく試みたもの

だ。京城にも撤く人はある筈だがよくは知らない。昨年平城に行つた時美州君に平城で撞く人を聞いたがないやうだつた。鎮南浦では黎明草君の八十點、頓海君も撞くに云ふことを可敷君から聞いたやうに思ふ。内地では廣島の夜叉王君、廣島に行く度に必ず一戦を交へる。大阪では二百點撞いてゐる船場の僕の從兄、長堀俱樂部や、日勝亭で試みる位である。二月初めに大阪に行つた時にも、大阪の柳人諸君を試みたいと思つたが折がなかつた。(二、三、三、仁川にて)

東京から東京へ

檜山千代二

自分が大阪から、東京へ流れつゝて、

足かけ四年になつて來た。が自分としては遺憾にも、東京の句會には七八回位しか顔出しもせず、大阪のやうに軽い氣分で、出かけた事はない。

それは自分の狹量かも知れぬ。また川柳を生んだ流れをくむ東京の句會のほんこの心をつかめないのに、依るのかも知れないが、その吟社でも、例會當夜の夕食がはりに、井物さか、おすしを各自に出すのも(勿論會費として出した金から)東京の習慣であらうか？

その喰ひ餘りやまた喰べ盡した、皿や井が灰皿がわりになつたり、飯粒が知らぬ半兵衛で胸のあたりにくつき、時には疊に落ちてゐるのは、如何に趣味の會とは言へ、實に不愉快なものである。また句作せんとしても、其の境地へ、自分ではさうしても落付けない。

そこまで未だに洗禮されてゐぬ自分かも知れぬ。

だが、自分は最初の内は今日こそは今度こそは、思ひながらも、その不愉快を思出す毎に大阪時代のやうに、足を運ぶ氣にはなれない。それをある人達は潔癖性だ、笑ふかも知れぬ。然し乍ら心ある人は、さう思つてゐるだらうか。それは單に見方の相違だらうか。しかし自分は思ふ。なんぞか東京の吟社の方々の考慮によつてなんぞかならぬものか。

それにつけても、大阪の句會が泌々と思はれてくる。わけて端の坊の句會が、印象づけられてゐる。そこが江戸ツ子上方との相違が知らう……。

それさにもなにもかも、超越してこそ、川柳人だ、云ふのかも知れないが、矢張り自分は狹量なのであらうか。また江戸ツ子畑は江戸ツ子、上方畑は上方で、謂ふ人があるのかも知れぬと思ふ。



各地柳壇

松 郎 編

萬よし偶會 (一月廿八日)

萬 よ し 報

(一)

間違へず按摩火鉢の前に座し
酒飲んで女按摩の洗み勝ち
揉んである手先に若い血が躍り
脊をきつう叩いて按摩手をさよめ
揉ませつゝ女將は刺りを誤たず
按摩ふき纏が咲いた事をきき
四ッ辻で按摩の腰が伸るやう
按摩の手きつちり帯を結んで来
大嵐按摩の家も寝てしまひ

(二)

(二月二日)

こわばつた糊に女房叱られる
晝飯を喰ふ糊賣に青い空
糊を解く亭主四十の春を過ぎ
オイ給仕糊と墨紙を持乍ら

三 三 三 三
平 笑 楚 楚

糊付けを着て綴長の負けて居す 萬よし

(三)

(二月十五日)

夕刊屋すげない紳士追かけて
所聞かれて夕刊屋あつち向き
夕刊に出たので旦那一人減り
十株程買ふて夕刊待乗る
夕刊を廣げも出来ぬ満員車
姐さんは角力欄へも目を通し

(四)

(二月廿八日)

午後十時亭主程よく酔んでゐる
午後十時幹事すつかり任される
午後十時引子本氣で招んでゐる
色街にすつかりなつた午後十時

(五)

(三月十三日)

入學へ庭の櫻が眞つ盛り
出戻りの姉も入學欣んで
入學はまだ校門に馴じまれず
入學の世話は女房にまかせさき

萬よし 三 三 三 三
楚 楚 楚 楚

鼎座小集 (神戶)

第二回 芳 香 子 報

度の強い眼鏡の兄が辭書を繰り
神戸港今日も靜かに黄昏れる
工場の煙も絶えて黄昏れる
進級に近眼の度が又進み
近眼の慌てたやうにお辭儀をし
墮落する氣ではなかつた夜學校
工場から吐き出す群に黄昏れる
片方が強い近眼鏡を掛け
近眼かと思へば女さにあらず
六階はまだ夕陽のビルディング
夜學もう濟んだ丁稚が風呂へ来る

鮎美居偶會 (二月十九日)

鮎 美 報

色男あれも社會の一人なり
湯の宿のかたい寝巻に夜が明ける
夫婦喧嘩茶碗が割れてけりがつき
毛のはねぬ薬がほしい色男
色男男の下駄を見て歸り
逃げたのは居根だ寝巻寒う立ち
逢ひに行く心算の工面して歸り
なやまじき追憶さはなりぬ寝巻
子の出来る茶碗並では羨なし

やなぎ句會 (二月廿一日)

柳 一 路 報

第一回 於石川縣小松町宮永屋
雪、ふり巻、雪すて
雪見酒苦勞でためた金でなし
川柳子

月給の不足の儘を母に見せ
洋服は其の月給にかゝはらず
月給を初めて貰ふ胸騒ぎ
月給をいくらか取るのか門構に
號外に事務所のみんな顔をあげ
見くびつて月給袋封を切り
號外に關係はなし膝枕 同
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

傘 二柳子選

貸傘の商號だけを太く書き
雨上り手に持つ傘の重い事
後ろからの傘が當つて除てやり
頭だけ助かつてある最合傘
次の日はからかさ千軒になり
二階から傘の字を讀む病上り
倒けた傘拾ふに車内みつめられ
傘さして町巾狭く通つて來 二柳子
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

ストーブ 松郎選

ストーブのそばの植木が氣にかかり
火夫だつた。ストーブを巧く焚き
ストーブの上に女給の古雜誌
又しても消えストーブに春が來る
ストーブを突つゝ廻す人氣者
戯談へストーブの側危がり
一番に來てストーブの火を起し
宿直がたゞストーブにくべる音
ストーブの前に夫人の優しすぎ 松郎
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

ロンドン追悼句會(三月十一日夜)

北山悟郎報

麻生路郎先生令息ロンドンさん(九才)が

逝くなられたに就て、故人に對する私のせめ
てももの花向けにもさ三月十一日夜、北區寺町
智源寺に於て其追悼句會を催しました。當夜
は路郎先生より出席者諸氏に御叮嚀なる御
挨拶がありました。尙當夜出席された諸氏
に對して主催者の私よりも厚く御禮申し上げ
ます。(悟郎)

線香 (兼題) 松郎選

線香は僧侶の袖に送られて
線香がもぐさの中で折れてある
でぼんちのあたりで線香燭を巻き
線香を立て、死骸がまだ知れず
泣くな、線香の煙ひさききり
線香持つ後ろ姿の派手な嫁
線香の匂ひに涙あらたなり
生きてあるものに線香無駄にへり
母親は線香を持って返事をし
線香を子供は恐い中に入れ
線香を子供の手にて立てさせる
亂杭のやうに線香灰になり
年寄りらしく線香うまくつけ 佳
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

線香のかはり亡き兒に接する氣
線香を懐かしうにつけに立ち
線香へ父こゝに居るこゝに居る
級長

胸にある房が凡てを語つて居
級長にうれしく試験近づいて
難題に級長みな顔見られ
級長は何日一人で歸るなり
級長になつて友達一人減り
級長は美し事後家の手に育ち
品行のまゝに級長墨が減り
級長の名は女生徒も知つて居る
級長は遊ぶ時間に用があり
級長の今日も歸つて手を仕へ
級長は級長らしく物を云ひ
級長の其後奉公してゐるなり
級長の級長らしく手を掲げる
學藝會級長が出てしんさする
級長もうちへ歸るさむつりや 生佛
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

編輯後記

世は春になつた。けれども私のこゝろは長閑でもなんでもない。大正天皇が崩御されてからこのかた私の家にも不愉快なことが、惨ましきことばかりがおこつて、ほんとに心をひらいて談笑することがない。一月から二月へかけて家族が全部病臥した。アトがひきつけてから肺炎になり四十度の高熱が續き、そして矢張り四十度の熱が續いた。他の軽いもののうちに數はられてゐた、ロンドンが九日から病臥して絶食状態になり、三月一日にはシフテリヤで遂に亡くなつてしまつた。亡くなつたからさて、あさの病人達を控へてゐては、がっかりもしてゐられない。只管病を養つてゐたが七日の地震のあさから一層面白くなつて、遂に十五日には五女のりしが、大阪の大學病院に入院して手術をうけなければならなくなつた。アトも純子も病院へ連れて行つた。私と霞乃と女中と總がかりである。幸ひ長崎醫學博士や尾崎醫學士のト方ならぬ御盡力で、兎も角も少しは落ちつきを見るに至つたが、葬式、入院と云つた引やつと不幸に多くの知友が全力を盡くしての好意は忘れやうとしても忘れがたいものとなつてゐる。ある親友のごときは神戸の

五人心中などの眞似をやつてはいけななさ心から心配して呉れた。私の面白くないことばかり申しあげてすまないが、雜誌の方は私の家庭とは正反對に、日に月によい方面へ向いて來た。▼表紙畫は柴舟氏の力作になり更に川柳漫畫にまで筆を揮つて貰つた。この川柳漫畫の句は「近作柳樽」と「川柳塔」から探ることになつてゐる。▼森田ひさし氏からも表紙畫を送つて貰つたが、既に柴舟氏のが出来てゐたので、好意を空しくなければならなかつた。▼今度新に岡山縣玉島町の津田耕水君が入社して、岡山支部をもつてくれることになつた。同地方の川柳家は同君を大いに援けて欲しい。▼國民座の森英治郎氏が句を寄せられた。劇から離れて川柳を作ることも面白いに違いない。句に餘力があるのもいい。斯うしたいろんな方面の人達に期待してゐる私達にとつてはうれしい。▼山口縣の兼重白鷗氏が三月五日に「川柳雜誌」後援會發會式といふ名で會を開かれた。尙同氏は三月廿五日に華燭の典を挙げられた。▼いゝこと嬉しいことゝを報じたあさにも同人河南放馬君の退社をも書かなければならないことを遺憾に思ふ。最も家庭の都合上であるから復活の望みが全くないのではない。▼神戸のK生君に告ぐ。住所氏名をお知らせを乞ふ。▼埋字句種は澤山集つたが、私の多忙と紙面の都合で次號まで待つて欲しい。(路郎生)

川柳雜誌社同人

主幹 藤路郎

岩崎 柳造 井上 月彦 馬場 史風 原 行風 橋本 二馬 西田 三松 徳田 双三 太田 朝陽 龜田 朝陽 高橋 眠童 高橋 眠童 竹内 柳多郎

(いろは順)

道領額支部 萬よし 天満支部 史風 濱寺支部 朝陽 築港支部 飯山 城南支部 美の作 西宮支部 英豆 淀川支部 松雨 神戸支部 萬よし

山口支部 洲馬 豊中支部 馬路 東京支部 柳路 函館支部 花童子 住吉支部 又柳 仁川支部 右大臣 岡山支部 耕水

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記すること。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

募 集

第四卷第六號課題

四月十日締切
(各題二十句以内)

- ▼雨戸 蛭子 省 二選
- ▼焼香 相元 紋太選
- ▼留學 小西 兎 共選
佐々木 三福

第四卷第七號課題

五月十日締切
(各題二十句以内)

- ▼鱗 森 東 魚選
- ▼染直し 林田 馬行選
- ▼公用 中野 柳陽 共選
庄 萬よし

每號募集

- ▼近作柳傳(卅句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳實(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓
(共稅郵)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも願ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年三月廿五日印刷
昭和二年四月一日發行

第四卷第四號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 麻生 幸二 郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 和正堂 三笠屋
(東京仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤) 石井
(國館) 石塚 (廣島) 金星堂 (石川縣小松) マコト屋

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るに新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

嘉納合名會社釀



非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

御家庭の喜びは

このレコードから!!

一枚は一枚づゝ

笑ひが漲ぎる

レコードの花形!!



合資會社 内外蓄音器商會